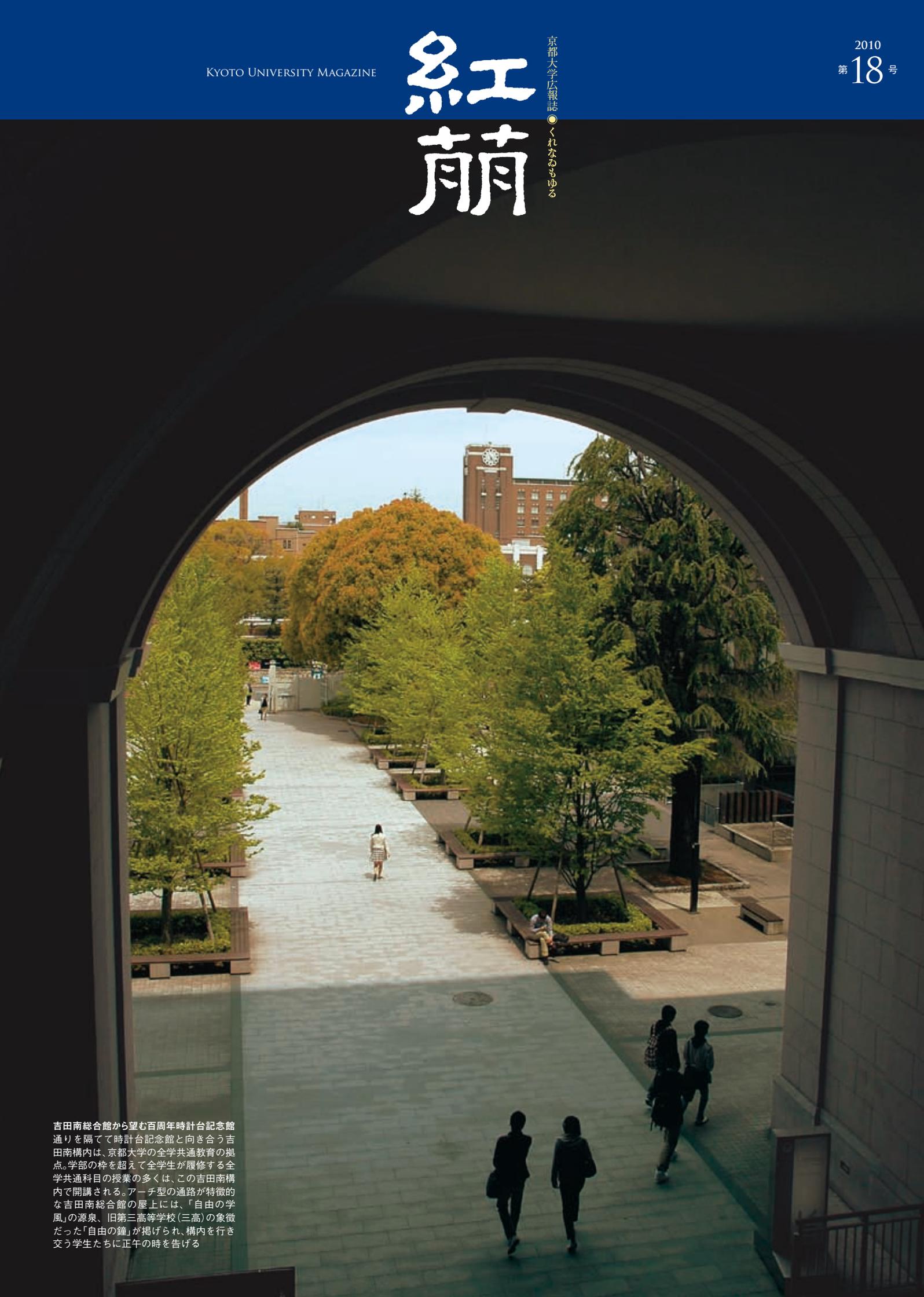


紅 萌

京都大学広報誌 ● くれなゐもゆる

吉田南総合館から望む百周年時計台記念館
通りを隔てて時計台記念館と向き合う吉
田南構内は、京都大学の全学共通教育の拠
点。学部を超えて全学生が履修する全
学共通科目の授業の多くは、この吉田南構
内で開講される。アーチ型の通路が特徴的
な吉田南総合館の屋上には、「自由の学
風」の源泉、旧第三高等学校(三高)の象
徴だった「自由の鐘」が掲げられ、構内を行
き交う学生たちに正午の時を告げる



巻頭エッセイ
私を変えた、人、葉
あの言葉

マザー・グースの歌

福岡伸一

青山学院大学理工学部化学・生命科学科教授

京都大学に入学したのはもう三〇年以上もまえ、一九七八年の春だった。時計台には白い大きな文字がなぐり書きされていたけれど、六〇年代の熱気はもうそこにはなく、かといって、来るべき八〇年代の軽やかさの予感もまだなかった。

そして私が求めていたものもなかった。ファールブルやドリトル先生の物語に親しんで育った夢見がちな少年は、ナチュラリストそのものが絶滅危惧種となっていることをようやく知ったのだった。

しかも、箱根の山を越え、わざわざ望んで入ったはずの理系だったのに、初めて出会う講義は難解で乾いていた。線形代数も、有機化学も、図学も、私を知りたいと願っていた問題——それは今から思えばあまりにも幼い自分探しにしかすぎなかったが——になんかの答もたらさないうちに感じられた。

古びたレコーダが繰り返す歌

むしろ、文系の諸学問に私は強く惹かれた。いまにして思えば、当時の教養部には驚くほど豪華なメンバーが揃っていた。阪倉篤義先生*が講じる、今昔物語の語り口に隠された秘密。渡辺実

先生*が解き明かす伊勢物語をめぐる謎。

米山俊直先生*が語るクロード・レヴィ・ストロースの認識の旅。心が躍った。

ある英語の授業で薄い小冊子が配られた。語学は少人数のクラスに振り分けられ、そこで使うテキストは教師の裁量に任されていた。

小冊子には、短い詩のようなものがばらばらと載っているだけだった。他のクラスは、文学書や評論の分厚いテキストを使っていた。真面目だった私



◎ふくおか しんいち
1982年 京都大学農学部食品工学科卒業
1987年 同大学院農学研究科食品工学専攻博士課程修了
1988年 米国防務省フェロー大学分子細胞生物学教室博士研究員
1989年 米ハーバード大学医学部博士研究員
1994年 京都大学食糧科学研究科助教授
2001年 同大学院農学研究科助教授
2004年 青山学院大学理工学部教授
分子生物学専攻。研究テーマは、狂牛病感染機構、細胞膜タンパク質解析など。専門分野で論文を発表するかわら一般向け著作・翻訳も数多く手がける。「生物と無生物のあいだ」(講談社現代新書、サントリー学芸賞受賞)は67万部を超えるベストセラーに。ほかに『動的平衡』(木楽舎)、『ルリボンカミキリの青』(文藝春秋)など。

は、ちよつと落胆し、貧乏くじを引いたような気がした。こんな子どもっぽいものではなく、もっと本格的な原書を勉強したいと。

講義の初日、教師はカセットテープレコーダを持ってきて、スイッチを入れた。音質のわるい曲にのつて、英詩が歌われていた。私たちはそれを延々と聞かされた。時々、教師はレコーダを止めて、ここは変わった言い回しだねとか、この発音は聞き取りにくいねえ、などと注釈とも感想ともつかないことをしゃべった。ひどい手抜き授業だ。教師が帰ると私はそう想った。

記憶は「上澄み」のように

おりしも、私がめざしていた生物学の世界に大きな変革が押し寄せてきた。生物は個体ではなく細胞、さらに細胞はタンパク質や遺伝子のレベルでこそ理解されなければならない。そして、それを具体化する技術が現れたのだ。バイオテクノロジー。いやおうなく私はその波に飲み込まれていった。虫捕り網は打ち捨てられ、ミクロな実験器具を手にしていった。

ずっとあとになって、私は自分が口ずさんでいるものにふと気がつく。それは在原業平が詠んだみちのくの歌だった。扉から落ちて割れた卵や、あるいは月を飛び越えた豚の歌だったりする。それは、おりおりの私をそっとはげましてくれたものであることにも、あらためて気づく。

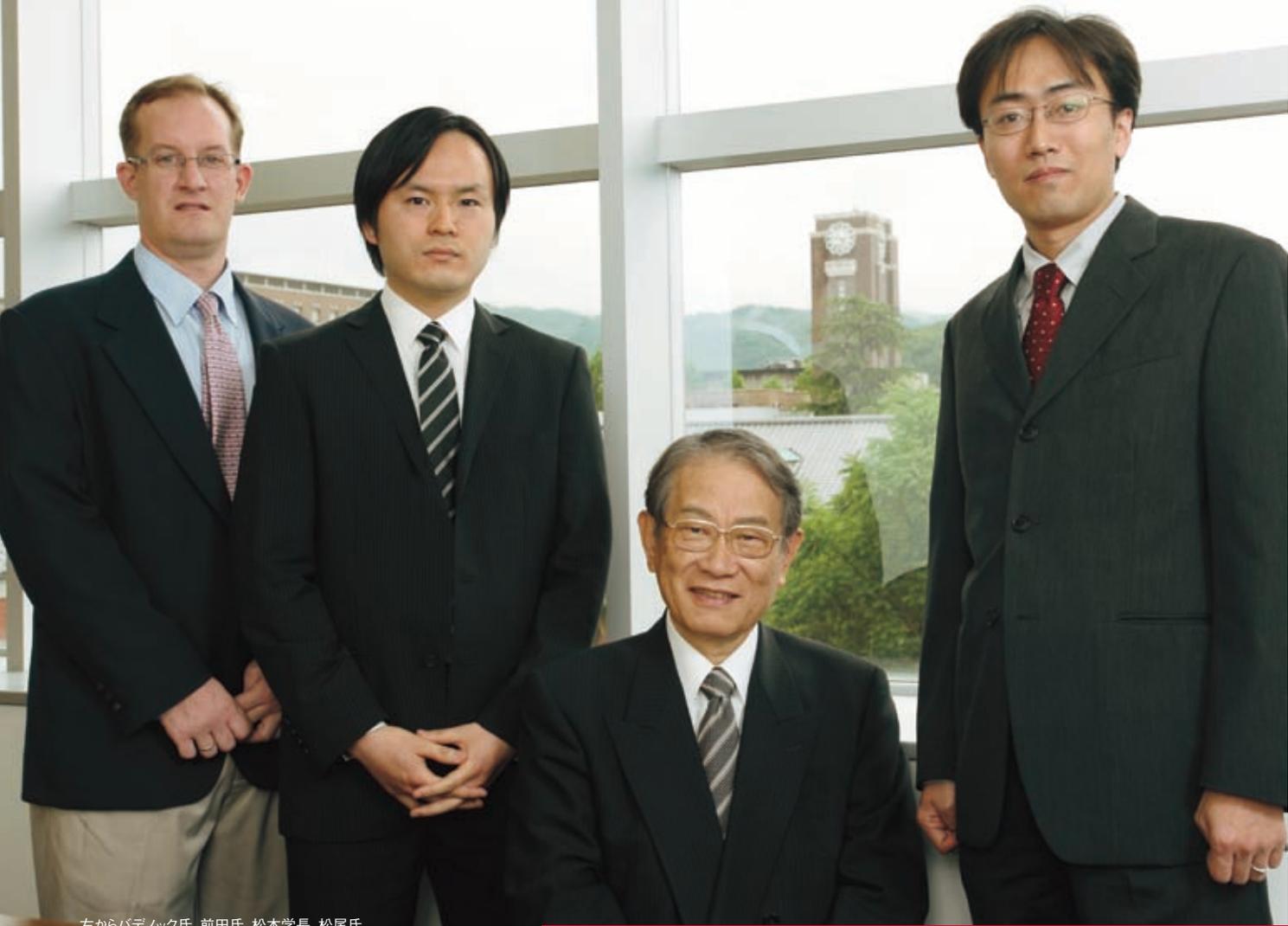
紅薔

京都大学広報誌

2010
第18号

◎目次

- 2 巻頭エッセイ 私を変えた、あの人、あの言葉
マザー・グースの歌 福岡伸一
- 3 巻頭座談会
白眉プロジェクトが拓く地平の可能性
——国を超え専門領域を超えて拡がる人の輪と和
ゲスト ネイサン・パデック＋前田理十松尾直毅
ホスト 松本敏
- 8 研究の最前線
新しい「教育評価」の導入で、
子どもが輝く教育をめざす
田中耕治＋西岡加名恵
- 12 邁進・京大スピリット——学生たちの活躍
週末子ども博物館／2009年度京都大学総長賞
将棋部／ポート部
- 14 授業に潜入！「おもしろ学問」講義録
記憶と学習——脳のしくみをのぞいて自己を知る
田中真介
- 18 ふりかえれば未来——モノ語る京大の歴史
学徒兵からの手紙——秘められた静かなる覚悟
西山伸
- 21 京都大学をささえる人びと
手の届く国際交流を 榎木竜二
- 22 京都大学の動き
追憶の京大追憶
- 24 「虚」の世界にちりばめられた「実」 綾辻行人



左からバデノック氏、前田氏、松本学長、松尾氏

巻頭座談会

白眉プロジェクト が拓く地平の可能性 国を超え専門領域を超えて広がる人の輪と和

優秀な若手研究者に五年間、自由な研究環境を提供する「白眉プロジェクト」制度。五人の兄弟のうち眉に白毛のあった一人がとくに優れていたという故事にちなむ。二〇〇九年度に立ち上げたこのプロジェクトには、二〇人の定員に六〇〇人近い応募者があり、各界の有識者から構成される「伯楽会議」などにおける審議をへて、一期生の一八人の採用を決定。松本総長と三人の一期生が夢と展望を熱く語る。

- ゲスト **ネイサン・バデノック** 准教授
前田 理 助教
松尾 直毅 准教授
- ホスト **松本 紘** 総長
- 司会 **荒井 修亮** 『紅萌』編集専門部会長

松本——京都大学はこれまで、優秀な教育者も優秀な研究者も輩出してきました。若い人材を教育・育成するだけでなく、先端研究や基礎研究をしっかりやるのも大学の使命と思っています。そういうなかで白眉プロジェクトは、分野を超えて基礎から応用に至るまで優秀な若手研究者たちを五年間にわたって准教授や助教などの年俸制特定教員として採用し、自由な環境のなかで研究に専念してもらおうというものです。いわば次世代を担う先見的な研究者を育成する取り組み。このキーワードは「若手」、「世界のトップクラスの研究者」の二つです。

この制度をとおして、異分野の人たちと話しあう機会を設けることで、まったく新しい独自の視野・世界をつくりだしていただけるのではないかと、私自身は大きな期待を寄せています。というのも、それが京都大学の伝統だからです。日本人初のノーベル賞受賞者となった湯川秀樹先生は、文学部の講義を好んで聴いておられたといま



◎松尾直毅 (まつお なおき)
 専門分野 神経科学・分子生物学
 1995年 大阪大学理学部卒業
 1998年 大阪大学大学院医学研究科修士課程修了
 2002年 京都大学大学院医学研究科博士課程修了
 博士(医学)



◎Nathan Badenoch (ネイサン バデノック)
 専門分野 地域研究
 1993年 上智大学比較文化学部卒業
 1999年 University of London School of Oriental and African Studies, Development Studies修士課程修了
 2006年 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了 博士(地域研究)



◎前田理 (まえだ さとし)
 専門分野 理論化学・計算化学
 2002年 東北大学理学部卒業
 2004年 東北大学大学院理学研究科修士課程修了
 2007年 東北大学大学院理学研究科博士課程修了
 博士(理学)

す。文学部の先生方と話をすることもお好きだったようです。素粒子理論、中間子理論と哲学とはどこかでつながっていると感じておられたようで、それが湯川先生の新しい理論の発端になったとも伝えられています。このたび選ばれた一八人の方には、そのような京都大学ならではの研究生活の伝統をふまえ、視野の広い、囚われのない心で学究生活を送っていただけることを期待しています。

荒井——プロジェクトは国際公募でしたが、この座談会にはみなさん進んでご参加いただいたのですか。

バデノック——採用者には外国人が二人いるので、外国人一人に日本人二人の枠でじゃんけんを……。

荒井——じゃんけんに勝ったのですか、負けたのですか。

松尾——私たちが勝ち残りました(笑)。

「書類選考」、「伯楽会議」、
 「総長面接」の審査をへて決定

荒井——六〇〇人ちかいか候補者からわずか一八人が選ばれたのですが、どのような選考方法だったのですか。

バデノック——研究内容の書類選考で四〇人に絞られたのち、学内外の有識者で構成される選考委員会「伯楽会議」の方がたと、一人四〇分くらいの面接がありました。

荒井——四〇分は長くなかったですか。バデノック——いえ、一瞬のことのよう

でした。私の研究課題は「Language, Diversity and Resilience in the

「Transition to Sustainable Society」ですが、「言語の多様性? なんじゃこりゃ」と思われた人もいました。でも、二人の選考委員には「なるほど」とすぐにわかっていただけた。もう二人はどう説明しても「うーん」という感じで、あとの五人ほどの方は、「よくわからないが、おもしろいかもしれないな。こんなもんだらう」と(笑)。私としては、もう少し補足説明をしたかったくらいでした。

松尾——私の研究課題は「遺伝子改変マウスを用いた記憶学習のメカニズムの研究」ですが、多様な領域の審査員の先生方と記憶とはいったいなにかという根本的な議論にもなって、かなり楽しく話ができました。内容のみならず、研究理念など学問の周辺についても問われました。

荒井——伯楽会議のすぐあとに一五分ほどの総長面接だったのですか。

バデノック——総長面接が英語だとは、応募者はだれも知りませんでした。

荒井——応募要領にはたしかに「日本語または英語による面接」とある。

松尾——つまり日本語だと思ってい

ましたから、最初に「人類の将来についてどう思うか」と英語で聞かれ、少し動揺しました。

荒井——研究内容についての専門的な話はなかったのですか。

バデノック——私は座った瞬間に、「Sustainable Society (持続可能な社会)なんて可能なわけないだろ」と言

われて慌てましたね。



荒井——いきなりけんか腰ですか。バデノック——そうです(笑)。でも、そ

こでひるんでしまったらだめでしょう。研究の全体的なビジョンをどう考えているかについてもビシビシ言われました。精神面でタフな研究者を要求されているでしょう。一か月後くらいに内定者の発表がありました。

五年間を研究三昧で過ごす
 魅惑的な暮らし

荒井——みなさんは、それぞれどのような動機で応募されたのですか。

バデノック——この一〇年ほどは、東南アジア諸国の開発援助プログラムに関わって、多様な民族が混住する地域での森・水・土の管理の研究をしていました。そこで得た経験やデータをもとに、人間の多様性を象徴する言語が現代社会でどのような意味をもつか、グローバル化によってどんな危機にさらされるのかに焦点をあてて研究する機会と場を探していたところでした。私は京都大学で博士号をとっていますから、研究環境もよくなりました。東南アジア研究所が



受入先ですから、言語や文化を研究対象にする人類学者や歴史学者、経済学者もたくさんいて、すごく居心地がいい。問題意識や考え方が似通っているからですね。

一方、ほかの白眉メンバーの研究内容は、資料をいくら読んでもわからないものがほとんどです。しかし、そういう人たちにも理解してもらえりょうな議論もしたい。多様性のある仲間のなかで人間的にもまると、個人の研究成果以上のなにかが得られるはず。五年後をたいへんに楽しみにしています。

荒井——じつは、私はバデノックさんとは旧知の間柄なのですが、語学がとてつもなく堪能です。

松本——いくつくらいの国のことばを話せるのですか。

バデノック——調査で使うのは国家の公用語と少数民族の言語をあわせて一〇か国語です。勉強したことのある言語を含めると二〇近くです。でも、

同じ単語であっても、分野が違ったり地域が違うとまったく通じないこともあります。ラオスでは、政府官と地域住民とで話すことばが違うこともあり。根本的な概念や宇宙観が違うので、ラオス語という共通語を使っても、話がかみあわないのです。言語の研究は限りなくおもしろいのですが、将来的にはやはり、人間社会の制度、政策づくりに貢献しなければならぬと思っています。

松尾——私は、自分の裁量で研究を進めたいとの気持ちが強くなっていったところで公募を見つけ、応募しました。私もバデノックさんと同じで京都大学で学位を取得しましたし、生まれ育ちも京都ですから、関西に戻りたいとも思っていました。京都大学らしいというか、五年間は自由に研究に専念できる、研究三昧の暮らしができるというのも魅力でした。

私の研究課題は、脳の研究です。人類が脳を理解できるかどうかすらいまだに議論の段階で、五年間でどこまで到達できるかはかなり難しい問題です。というのは、記憶というのはたんにものを憶えるという無機質なものでなく、人間存在そのものに関わると信じているからです。つまり、記憶というのにはある意味、その人の人生の記録、生きてきた証のようなものもあります。だから仮に脳を入れ替えると恐らく別人になってしまう。つまりは、記憶というのは人格を形成しているものでもあるといえます。

もともと私は分子生物学が専門で、DNAやタンパク質など物質として存在するものを扱ってきました。それだけに記憶というのはとらえどころがなく、実体のわかりにくいものです。それでも、物質としてのなにかの基盤が絶対にあるはず。いまの私は、それを目で見るように可視化し、さらには操作を加えてみることによって記憶の実体を明らかにしたいと考えています。

前田——私は京都は初めてでしたが、次のポジションを探していて、これまでの研究をさらに進めるうえでいちばんよい道だと思つて応募しました。私の研究課題は「反応経路自動探索法による生化学反応機構の系統的量子化学的解明」、受入先は福井謙一記念研究センターです。

幼いころ、物質は原子でできていると教えられたとき、物質を組み立てる要素がわかっているのなら、組み立てかたしだいでなんでもできるはずだと考えました。でも、実際にはそうはいかない。化学反応をどのように起こせばよいかわからない。そこで、実験室でプラスチックを振るうようにコンピュータで化学反応を自動的に予測できるようにするのが私の目標です。いまは、その方法の開発をしています。

松本——これまでに蓄積された基本的な知識ベースにあるいろいろな反応を、人間が一つひとつ考えてゆくことはできないから、コンピュータにやらせようということですね。

前田——そうです。また、人間には思いつかない反応も、その方法ならば見つけることができます。最初は原子が三個か四個という系の解析しかできませんでしたが、より複雑な系を扱える方法論へと発展してきました。この五年間で、実際に役に立つ反応に応用できるようにしたいですね。まずは生体物質が対象ですが、いずれは固体や溶液までゆきたい。

反応のデータベースをつくるにしても、こういうことに使いたいという具体的な要望を、さまざまな分野の人から提案してもらって、それぞれ現場でちゃんと役立つようにサポートしたいと思っています。最終的には、「役に立つてなんぼ」だと思っていますから。

「知的ファイト」の経験は進歩の源泉

前田——かつての研究仲間たちに現在の研究環境を話すと、とてもうらやましがられます。白眉プロジェクトでは、まったく異分野の人たちと話す機会が多いことにも驚いています。

松尾——研究者といっても社会の一員です。人間は社会的な動物ですから、人のつながりは大事です。月に二回の研究発表会も刺激的ですが、そのあとの飲み会での気軽な交流と議論はもっと楽しい。先週は、ビールの味の話からはじまり「快」の話に展開しました。インド哲学の観点からとらえた「快」とはなにか、食品科学の観点から

氏名	受入先	職	研究課題名
Aaron Miller	教育学研究科	助教	The idea of education in modern sports : Historical and ethnographic constructions from the US and Japan
青山 和司	理学研究科物理学・宇宙物理学専攻物理学第一分野凝縮系理論グループ	助教	磁場中超伝導状態における磁気揺らぎの効果の理論的研究
上野 賢哉	情報学研究科通信情報システム専攻論理回路分野岩間研究室	助教	論理式サイズ下界に対する線形計画的方法論
小川 洋和	人間・環境学研究科共生人間学専攻 (齋木潤教授)	准教授	人間の暗黙知の源となる潜在認知過程メカニズムの解明
川名 雄一郎	次世代研究者育成センター	助教	古典的功利主義の社会思想の研究一体系的な理解と現代社会への提言
齊藤 博英	生命科学研究科遺伝子動態学分野 井上丹研究室	准教授	シンセティック・バイオロジーを活用した細胞機能制御技術の開発
佐藤 弥	霊長類研究所	准教授	顔を通じた社会的相互作用の心的メカニズムの解明
塩尻 かおり	生態学研究センター	助教	植物コミュニケーションの生態系へのインパクトとその利用
志田 泰盛	文学研究科インド古典学研究室	助教	古典インド聖典解釈学派による音声の永遠性論証の研究
千田 雅隆	理学研究科数学教室	助教	ガロア表現の変形と保型 L 関数の特殊値の岩澤理論的研究
東樹 宏和	理学研究科生物科学専攻動物生態学研究室	助教	生命系の共進化：新奇なモデル系の確立による分野横断型アプローチ
Nathan Badenoch	東南アジア研究所	准教授	Language, Diversity and Resilience in the Transition to Sustainable Society
前田 理	福井謙一記念研究センター	助教	反応経路自動探索法による生化学反応機構の系統的量子化学的解明
松尾 直毅	医学研究科分子生体統御学講座 長田重一教授研究室	准教授	遺伝子改変マウスを用いた記憶学習のメカニズムの研究
村主 崇行	基礎物理学研究所 柴田研究室	助教	偏微分方程式の数値解析のための大規模並列プログラムの自動生成
柳田 素子	生命科学キャリアパス形成ユニット	准教授	新しい国民病、慢性腎臓病の病態解明および治療法・診断法の開発
吉永 直子	農学研究科応用生命・化学生態学研究室	助教	鱗翅目幼虫腸内物質 FACs から拓く昆虫の窒素栄養代謝制御の研究

(五十音順)

白眉プロジェクト

目的

- ・優秀な若手研究者を年俸制特定教員(准教授、助教)として採用
- ・自由な研究環境を与え、最長5年、ひたすら自身の研究に専念

次世代をリードする先見的な研究者の育成

公募要件

対象分野：人文学・社会科学・自然科学の全分野
 応募資格：博士の学位を有する者(同等の能力を持つ者も含む)
 採用予定：毎年度20名を上限として採用
 待遇：年俸制特定教員(准教授、助教)として最長5年の任期で採用
 公募方法：国際公募
 研究費：研究内容により年間1,000千円～4,000千円支給
 所属：次世代研究者育成センターとするが、実際の研究は京都大学の受入先(応募に当たり、受入先の内諾を得ておくことが望ましいが、応募の要件とはしない)
 研究成果：研究活動の報告は行なうが、評価等は行なわない
 その他：センターのプログラムマネージャーによる各種育成支援

選考手順

これまでの研究内容や今回応募した研究計画といった研究面の評価のみならず、次世代のリーダーとしての資質等を総合的に判断して、以下の手順により採用者を決定



白眉プロジェクトの1期生のみなさん。月2回開催される白眉セミナーでは、リラックスした雰囲気なか、さまざまな専門分野の視点からの意見が飛び交う

「快」とはなにか、心理学の観点からみた「快」とはなにか、話題はどんどん展開して、あたかも梁山泊の世界のようです(笑)。

松本——そういう刺激的な世界がこのプロジェクトに期待したひとつの姿であり、私たちがこのプロジェクトを推進した所以です。大学の人事は、各部署が担当するのが通例です。しかし、部署は専門集団ですから、専門を離れた分野に抜けて考えたり行動することはなかなか難しい。専門家ばかりだと、特定の専門領域に吸い込まれる力が大きくなるからです。一方、白眉プロジェクトでは専門を異にした専門家が集まる。そういう仕組みを大学の学部や専門を超えてつくりたいと考えてスタートしたのですが、まさ

にわれわれが意図した姿が誕生している。喜ばしいことです。

私も飲み会に誘われて、白眉のみなさんと話したことがあります。とにかく議論が白熱する。私は議論をかき混ぜるのが好きな性分で、いろいろな観点から疑問を述べるのですが、それぞれにきちんと答えが返ってくる。しかも、その議論が多様性にあふれていて、とにかくおもしろい。とても刺激的であり示唆的です。プロジェクトのみなさんもそのように感じていると思う。飲んで議論する「知的ファイブ」は、人間の進歩の源泉です。京都大学は「対話の大学」と言われますが、対話を実践していただくことで思惟・思索を大きく飛躍させ、世界のだれもが成し得ていない研究に到達してほしいものです。

荒井——このかたちを五年間続けることは、大学としてはたいへんなような気もしますが、いかがですか。

松本——いまは二〇人ですが、五年間つづけると……。

バデノック——一〇〇人になりますね。

松本——一騎当千の研究者が一〇〇人もいるのは大きな力です。五年後には初年度の一八人は期限を迎えますが、新しい段階に進む機会ともなる。現実には、みなさん優秀だから、おそらく途中で抜ける人がでてくると予測しています。もちろん五年間きっちりやっていたらよいのですが、すでに一八人のうちの一人は引き抜かれました(笑)。でも、それは私たちの



意図するところでもあるのです。
荒井——五年間のうち一年か二年、外国に行くのも可能なのでしょうか。

松本——まったく自由です。給料プラス研究費の予算の範囲内で、自ら計画して外国に武者修行に乗り込んでもらってもよい。白眉プロジェクトは基本的に個人の努力と能力に依存しています。大学側は研究内容にタッチしませんし、評価もしませんから、高いモチベーションをもち続けていただかないといけません。

こういう研究三昧ができる環境は、日本には多くはないはずです。ほかの研究者に論文が引用された数がどうこうといった近視眼的な話ばかりになる。インパクト・ファクターが学術的な価値を測るすべてだと言わなければ、論議に支配されてはいけません。引用数を研究者の仕事の評価基準にするなんて、まったくの方向違いです。論文の数がいくらあっても、たいていは五〇年たてば忘れられる。それよりも、「研究者として生きている」という充実感をもちながら学究生活を送ってほしい。「私が世界を変える」という意識のもとに研究に取り組む、そういう集団を私は期待しています。

「白眉隊」に期待する 社会と大学にアピールする

松本——今年度の一八人は、いわば一期生です。来年度には二期生が誕生する。そうすると一期生と二期生との交流が楽しくなる。五期生までいくと

八〇人の後輩ができる。一期生のあなた方には、そういう後輩を指導していただきたいですね。もちろん、学生もです。みなさんに教育の義務はありません。でも、学生に刺激を与えることはできます。脳科学をやりたい若手の研究者や学生がいたら、「おい、こういう研究をしないか」、「おまえの研究はここがすばらしい」など、いろいろな言い方があると思いますが、後輩を挑発していただきたい。教えることは学ぶことですから。

バデノック——白眉プロジェクトとして社会にどうアピールするか、あるいは京都大学の学生に白眉としてなにができるかも検討しています。

松本——「これから時計台の前で議論しよう」と書いた幟を立ててキャンパスを練り歩いたら、熱心な学生が集まりませんか。みなさんは「白眉」と書いたTシャツでも着て(笑)。

バデノック——数人は賛成してくれそうですね(笑)。

松本——白眉の人にはできるだけ国際語でしゃべってもらいたい。日本語も大切ですが、中国語でもいいし英語でもいい。会話のトレーニングの場にしていただきたい。理科系の人は文科系の専門用語を英語でどう表現すればよいかわからない。文科系の人は理科系の日本語の言葉を英語でどう表現するのかとまどう。ふだん使う機会があると、それだけで表現の幅がすごく広がります。

バデノック——白眉のメンター(良き助

言者)の田中耕司先生に、その仕組みを考えるように言われました。二期生、三期生で、日本語がわからない人が入ってくる可能性もあります。そうになると、ガバナンスにおける言語の多様性の問題で、白眉をどう運営するかということと深く関わってくる。これはまさに私の研究関心と重なる部分です。一人でも日本語がわからない人が加わったら全員が英語を話さないといけなくなるのか、上手に管理しないといけませんね。

松本——一〇か国語が話せるバデノックさんは、きょうは日本語、あすはビルマ語と、「日替わり言語」を試みてはどうですか。

バデノック——嫌われますよ(笑)。
松本——京大生は、英語が下手だと言われている。知識が足りないこと、言語能力の不足の両方が原因です。たとえば哲学だと、「東洋にはこういう哲学がある」、「日本にはこういう哲学がありました」という話を切り出せる力が必要です。白眉プロジェクトの研究者には自由時間はたつぷりあるはずですから、しっかり研鑽を積んで「白眉隊」と一目おかれるような集団になっていただきたいものです(笑)。

荒井——白眉という言葉からは、そういう革新を起こす人たちの集団だという印象を受けますね。
松本——優秀な人たちですから、ぜひ期待に込めてほしいと願っています。

二〇一〇年五月二六日(水)

総長応接室にて

研究の最前線

教育学の研究対象は、日に日に成長する子どもたちとその発達を助ける教育現場。ゆとり教育、少子化傾向、全国学力テストなど、子どもたちの学習環境もまた、時代とともに変化する。教育学の真なる研究成果を実証するものは、いまを生きる子どもたちの瞳の輝き、教師たちの達成感。その最前線ではつねに、未来を担う子どもたちにとっての「よりよい教育」が模索されている。田中耕治教授が率いる教育方法研究室の研究テーマは、子どもたちの「学び」と教師の「教え」を結ぶ「教育評価」。学校現場との連携や教師たちとの交流をとおして、新たな教育実践方法の提案やツールの開発など、教育の改善を多角的に探究する

大学院教育学研究科

新しい「教育評価」の導入で、子どもが輝く教育をめざす

田中耕治

大学院教育学研究科教授

西岡加名恵

大学院教育学研究科准教授

まずはじめに、次の四択問題にお答えください。

「教育評価」とはなんでしょうか？

- ① 教師が子どもの能力を評価する。
- ② 教師が子どもの学力を評価する。
- ③ 教師が自分の教育実践を評価する。
- ④ 社会が学校の教育実践を評価する。

①～④はどれも、学校教育の現場で行なわれる評価の一種です。日常生活での感覚であれば、①か②が正解だと思われる方が多いことでしょう。しかし、教育学の用語としての第一義的な意味は③です。つまり、教師自身が自らの教育実践の成否を評価することを「教育評価」といいます。

魅力ある授業づくりに不可欠な「目標に準拠した評価」

教育とは、子どもの発達を助けるための意図的な働きかけです。その教育実践の成否を確かめるには、教

育する側が意図した学力を子どもたちがたしかに身につけたかどうかを見極める必要があります。ここでいう「学力」は、子どもたちのもつ能力一般ではなく、教育目標として、教師が設定した部分的な能力を指します。したがって教師が教育評価③を行なうには、子どもたちの学力評価②が必要です。さらに近年では、学校の説明責任（アカウンタビリティ）を求める風潮が強まるなかで、社会による学校評価④の考え方も普及しています。

子どもの学力の評価をとおして教師の教育実践を評価するという考え方は、教育を改善するうえでは必要不可欠です。しかし、このような「目標に準拠した評価」の考え方がよくよく日本の教育政策に採り入れられたのは、二〇〇一年になってからのことでした。それまでの教育政策では、学級や学年単位での順位づけによって成績をつけるという「集団に準拠した評価（相対評価）」が採用されていたのです。

こうした状況のもとで、京都大学の教育学研究科教育方法学講座教育方法分野（以下、教育方法研究室）とその前身である教育課程研究室は一九七〇年代以降一貫して、いち早く教師自身の教育評価に焦点をあてて、教育学研究に取り組んできました。

子どもの学力の相対評価は、一定割合の子どもの「落ちこぼれる」のが前提となっています。成績の低い子どもが相対的な成績を上げようと思うと、自分より上位の誰かを引きずりおろさなくてはなりません。そこには、教育改善につながる道筋はありません。教育方法研究室は、そのような相対評価の非教育性を批判し、「目標に準拠した評価」を推進する一



図1 パフォーマンス課題に関わる話し合いのようす
論点について意見をたたかわせる生徒たち
提供：三藤あさみ先生（横浜市）

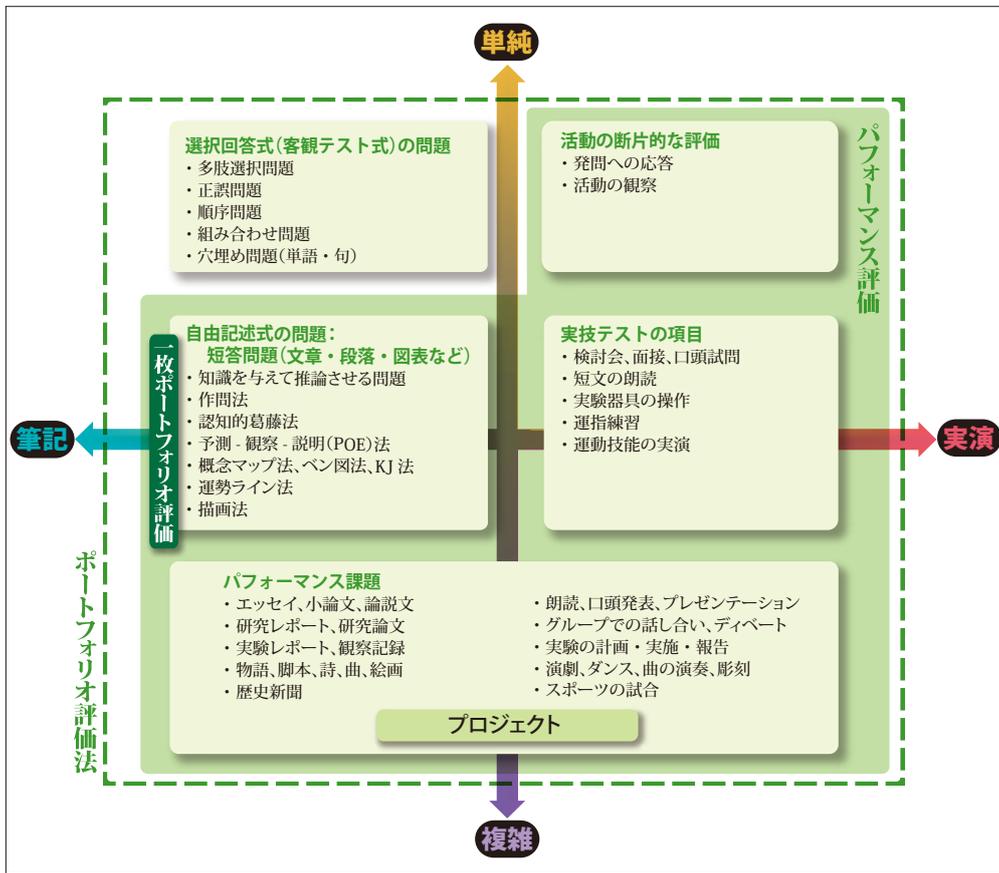


図2 ささまざまな学力評価の方法
筆記テストだけが評価方法ではない。近年は、レポートやプレゼンテーションなど、さまざまなパフォーマンス評価の方法が学校現場で用いられている
作成:西岡加名恵
参照:西岡加名恵・田中耕治編著『活用する力』を育てる授業と評価 中学校——パフォーマンス課題とルーブリックの提案』学事出版、2009年

翼を担ってきました。

「思考力・判断力・表現力を育てるパフォーマンス評価」

教育方法研究室では近年、とくに「パフォーマンス評価」の研究を進めています。パフォーマンス評価の定義については、この用語の発祥地であるアメリカでも論者によってさまざまです。しかしながら、現在の理論的到達

点をふまえれば、次の三つの考え方がセットになった評価の立場を示す用語として捉えることができるでしょう。

① 知識・技能を

「関連つけて活用する力」を重視する

学校で保障すべき学力には、知識・技能を「暗記・再生する力」だけでなく、文脈において知識・技能を「活用する力」が含まれているという目標や技能は、バラバラなものとして獲得されるだけでは不十分です。子どもたちがそれを自分のものとして使いこなせる状態にするには、個々の知識や技能が互いに関連づけられ、深く理解されている必要があります。そのような深い理解に裏付けられた思考力・判断力・表現力は、二〇〇八年に改訂された学習指導要領でも重視されています。

② 子どもたちに「実践させて」評価する
知識や技能を関連つけて活用できるまでに身につけたかどうかを評価するには、実際に子どもたちが知識や技能を活用する場面をつくる評価方法が有効です。その具体例として、観察や対話による評価や実技テスト、自由記述問題による筆記テスト、レポートやプレゼンテーションといった評価方法があります(図2)。

③ 「ルーブリック(評価指標)」を用いる
ルーブリックとは、パフォーマンスの成功のレベルを示す数段階程度の尺度と、それぞれのレベルにおいて期待されているパフォーマンスの特徴を説明する記述語とで構成される評価

方法があります(図2)。

子どもと向き合う現場の教師との共同研究

基準表です。子どもたちが生み出した完成作品や実演(パフォーマンス)を、評価者が共同でレベル別に分類し、それぞれの作品群にどのような特徴が見られるのかについて話し合っ作成します(図3)。

この方法であれば、各レベルに対応するパフォーマンスの典型的な事例を整理できます。完成したルーブリックに作品例(アンカー)を添付しておくことで、評価の観点や水準を共通理解するうえでも有効です。

このような評価方法の研究を進めるには、さまざまな文献にあたったり、海外も含めて多様な学校を訪問調査したりして、最新の情報を集めることももちろん必要です。一方で、実際に教育が行なわれている学校現場に私たち研究者が出かけて、先生がたと共に評価方法の開発研究を行な



図3 ルーブリックづくりのようす
校内研修では、子どもたちの作品を見ながら、育てるべき学力はなにか、どのように指導を改善できるかについて、具体的に話し合わせる
提供:京都市立衣笠中学校



◎にしおか かなえ
1993年 京都大学教育学部卒業
1995年 京都大学大学院教育学研究科修士課程修了
1998年 英国バーミンガム大学にてDoctor of Philosophy (Education) 取得
1999年 鳴門教育大学講師
2004年 現職



◎たなか こうじ
1980年 京都大学大学院教育学研究科博士課程単位取得満期退学
京都大学教育学部助手
1980年 大阪経済大学経営学部助教授
1987年 兵庫教育大学学校教育学部助教授
1988年 京都大学大学院教育学研究科助教授
2002年 現職

ムに関わる研究成果や政策動向を紹介する講義を行ったり、パフォーマンス課題やルーブリックの作成に取り組みワークショップなどを取り入れています(図6・7)。

参加者が研修で開発した課題やルーブリックは、「カリキュラム設計データベース(CDDB)」に入力してもらいます(図8)。E・FORUMの研修には、日本各地から現役の教師が集まりますが、インターネット環境さえあれば、CDDBにアクセスして、ほかの先生がたが開発した課題やルーブリックを参考にすることができま

す。さらに、それぞれが開発した課題を現場で実践していただき、半年後にその成果をもち寄って交流する「実践交流会」も行なっています。

大学院生による授業研究

学校現場と連携しつつ研究を進める教育方法研究室のスタイルは、現在では、京都大学大学院の研究者養成コースのカリキュラムにも取り入れられています。

教育方法研究室に在籍する研究者養成コースの大学院生たちは、日本の生活指導論やフランスの大学入試制度、ドイツの音楽教育、イギリスの数学教育、アメリカの読解力指導や障害児教育、オランダの学校評価、中国の



図7 参加者が活発に意見を交換するワークショップ (E.FORUM全国スクールリーダー育成研修にて)



図6 最新の研究成果や政策動向を紹介する講義 (E.FORUM全国スクールリーダー育成研修にて)

作文教育など、一人ひとりの問題意識にそくした研究テーマを探究しています。と同時に全員が、京都市立高倉小学校における共同授業研究「プロジェクトTK」にも参加しています。

「プロジェクトTK」の特徴は、大学院生が小学校の教育現場に日常的かつ継続的に関わること。日本では、研究者が学校の先生がたと共同で授業研究に取り組む例も少なくありません。しかし、その多くは一時間あるいは一単元の授業と事後検討会に

明日の教育をより良いものにするために……

学校教育のあり方については、さまざまな批判の声も寄せられています。しかし、学校現場に実際に足を運びますと、生き生きと学ぶ子どもたち、そして、工夫を凝らしながら精一杯、授業に取り組んでおられる先生がたに出会います。

これからも私たちは、そのような子どもたちの姿から元気をもらいつつ、先生がたと連携して研究を進めていきたいと願っています。



図9 授業を観察する大学院生たち (京都市立高倉小学校にて)

Curriculum Design DataBase@京大教育

個人ページ >> 他の会員の単元一覧

検索(対象学年・教科等種別・単元名称・キーワードから絞り込むことができます)

1. 対象学年: 何でもよい
2. 教科等種別: 何でもよい
3. 単元名称に含まれる文字列(部分)(空白や記号は無視されます):
4. キーワード(作成者付与): 何でもよい
5. タグ(DO管理番号・アドバイザー付与): 何でもよい

検索結果一覧

検索結果ページ: 2009年中 1-10件目

ID	単元名称	図形
149	多角形の角	図形

日常的に議論ができる掲示板

パフォーマンス課題やルーブリックなどを登録。ほかの会員も検索して、教育に役立てることができる。2010年5月20日現在、登録されている会員数316名、単元数290件(うち公開193件)

図8 CDDBの検索ページ
研修を受けたE.FORUM会員が、パフォーマンス課題やルーブリックなどのデータを入力するデータベース開発者:中池竜一助教

ぼくが取り組む数式は、 コンピュータの計算能力では 追いつきません

●2009年度京都大学総長賞

岸本 展きしもと のぶ 大学院理学研究科数学・数理解析専攻
日本学術振興会特別研究員PD (現在)



物心がつくころには、すれ違
う車のナンバープレートで
足し算あそびをしていた岸本さ
ん。小学生ですでに中学校レベル
の数学は理解できたという。

研究テーマは「非線形偏微分方
程式」。ニュートンの運動方程式の
ように、物理現象などの記述にも
用いられる微分方程式の一種。こ
の難解な方程式のなにおもしろ
いのか、その理由をたずねると、岸
本さんの目は輝いた。前のめりの
姿勢で途切れなくあふれる言葉か
ら、数学への情熱がひしひしと伝
わるが、こちらの理解が追いつか
ない。その表情をよみとるや、言
葉をやさしく言い換える。「高校で
習う方程式は公式を使って解(答
え)を求めますが、非線形偏微分方
程式には公式がなく、そもそも解
があるのかどうかもわからない。だ
から、式を解く方法論から考えな
ければなりません」。

在学中に博士号を取得した岸
本さんの活躍はめざましい。ある
方程式の「物理的に自然な性質を
もった解を見つけた」ことが評価
され、2009年度の日本数学会賞
建部賢弘賞奨励賞を受賞。数学
界を活性化させた若手研究者に
贈られる栄誉だ。こうした活躍が
認められ、2009年度の「京都大学
総長賞」も受賞している。

期待の若手数学者が持ち歩く
ツールは、意外にもありふれた
ノートとペンのみ。「ぼくが挑む
のは無限の世界。有限のパソコン
のメモリでは処理しきれないん
です」。たよりにするのは自分の頭
脳。寝ても覚めても数式が頭から

離れない。眠っているあいだも脳
は働いているのか、起きぬけにひ
らめくこともある。「数学研究の
醍醐味は、考え続ける過程で少し
ずつ光が見えてきたときのわくわ
く感と、答えを見つけたときの爽
快感。とにかくいまは、数学さえ
あればそれでいい」。まだまだ非
線形偏微分方程式には無限の謎
があるという。数学に取り憑かれ
た岸本さんの挑戦は続く。

*京都大学総長賞の受賞者情報
<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education/presidents/presidents/index.htm>



●週末子ども博物館
毎週土曜日 10:00~16:00
参加費無料(博物館への入館料は必要です)
*京都大学総合博物館ホームページ
<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/>

学生たちの活躍

邁進・京大スピリット

未知を楽しむ子どもたちの 「まっすぐな好奇心」にドキドキ

●週末子ども博物館

塚本明日香つかもとあすか 大学院人間・環境学研究科博士課程3回生
塚本靖之つかもとやすゆき 大学院理学研究科修士課程1回生

京都大学総合博物館のエント
ランスホールで、毎週土曜
日に開催中の「週末子ども博物
館」は、〈化石とあそび〉、〈浮世絵
でぬり絵〉など、体験型の多彩な
メニューで人気がある。企画・運
営にあたるのは、京大大学院生を
中心とする約30人のスタッフ。そ
れぞれの専門知識や博物館の展
示資料などを活かして、楽しみな
がら「知とふれあうコンテンツづ
くり」に挑戦している。

この活動に姉弟で参加してい
るのが、塚本明日香さんと靖之さ
ん。大学院では共生文明学を専攻
し、東洋史の研究で漢文と格闘し
ている明日香さんは、「自分の名
前を変体仮名で書く」コーナーや、
「意外と知らない日本神話の魅力
を伝えたい」という思いから、得意
なイラストを駆使した「日本神話
の塗り絵」のコーナーなど、ユニ
ークな企画が得意。

ある土曜の午後、会場を訪ねて
みた。顕微鏡の前に、「ねえ、ちょ
っとのぞいてごらん。この石へんな形
だね」、「どんな味かな、なめてみよ
うか」。明日香さんは子どもたちの
小さな好奇心をたぐり寄せる。

「子どもの反応は一人ひとり違う。
ここでは違ったもの見方がえら
れて新鮮です」。

「口べたで人見知りする弟に、い
い刺激になるのでは」と考えた
姉の誘いで参加した靖之さんが
企画したのは「多面体づくり」。幾
何学と趣味の紙工作を合体させ
た人気のプログラムだ。型紙から
切り出した数本の紙紐を、糊を
使わずに、編み込むように組み
立てる。「見本を参考に、どんな
規則性があるのかを発見するの
がポイントです」。まずは直方体
のサイコロづくりでコツをつか
んで、12面体、30面体と、徐々
にレベルアップ。

能動的な明日香さんとは対照
的に、靖之さんはじっと待つタイ
プ。子どもの表情や手元を冷静に
観察し、相手の自尊心をくすぐり
ながら、タイミングよく最小限のアド
バイスを与える。負けず嫌いの男
の子とは相性がぴったりだ。「愛
想はないけど、いちどに十数人が
集まっても冷静に対応できます」。

姉は研究者、弟は高校の教師を
めざして、それぞれの道を邁進中
でもある。



強さの秘訣は「ゆるい」結束力と「一点集中」

●将棋部
部長／西村佳悟 理学部物理学専攻3回生



と思いきや、部室に漂うのはなんと「ゆるい」空気。

「できれば次は勝ちたいけれど、特別な練習はしません。いつもこんな雰囲気です……」と首をすくめる西村さん。先輩の引退後、世話役の部長と大会出場選手の選出権をもつ主将のポストを任せられたが、気負いはまったくない。棚に無造作に並ぶトロフィーや賞状が、それを物語っている。

活動日や時間の取り決めはない。堅苦しい上下関係もいっさいなし。それぞれが好きなときに部室を訪ね、好きなように過ごす。

インタビューを進めるほどに、「強豪・京大」の先入観は崩れてゆく。しびれた足をこっそりなでながら、あらためて部屋を見渡すと、棚には将棋の専門書だけでなく、ボードゲームやトランプ、麻雀、テレビゲームなど、将棋以外のゲームもたくさん並んでいる。「将棋で行き詰まったとき、ほかのゲームで息抜きをするんです」。

ゴロリと横になる部員もいる。まるで自分の部屋にいるかのようなリラックスぶり。主体性を尊重し、それぞれが自分なりのスタイルで「将棋に集中して過ごす」、これが京大将棋部の唯一のモットーだ。

関東出身の西村さんは小学校のころ、プロ棋士・羽生善治氏を輩出した名門「八王子将棋クラブ」に通っていた。「将棋はまぐれで勝てるゲームじゃない。やればやるほど強くなる」。棋譜や解説書で研究し、対戦経験を重ねて手数を増やす。戦術と戦術とがぶつかりあうおもしろさは、「いちどはまると抜け出せない」。

理系男子ばかりだった将棋部に、この春、待望の女子部員が加わった。「女性が将棋に向かないとは思いません。これをきっかけに、もっと女子が増えれば……」。マイペースな部長も、このときばかりは力をこめた。

*将棋部ホームページ
<http://kyotoshogi.web.fc2.com/>



厚い座布団を勧められ、将棋盤ごしにインタビューを始めるも、対局に熱中する部員たちは、来訪者を気にもとめない。

京都大学将棋部は、西の京大・立命館、東の東大・早稲田と称される強豪の一つ。毎年10校で争

われる毎日杯争奪全国大学対抗将棋大会(2009年)では、立命館大学につぐ準優勝。2010年6月に行なわれた関西学生将棋連盟主催の春季一軍戦も宿敵立命館に惜敗、またもや2位に甘んじた。「打倒立命館」に燃えているのか

めざすは全国制覇！ 百年越しの悲願に挑む二人のリーダー

●ボート部
主務／清水裕史 工学部電気電子工学科4回生
主将／大野弘迪 農学部資源生物科学科4回生



創部100余年のボート部で、この夏100名の部員を率いるのは、主務の清水さん(写真右)と主将の大野さん(左)。二人が入部を決めたのは偶然にも、2007年の合格発表の日だった。

「喜びのあまり安心して、気づいたら先輩に肩をつかまれていました」と苦笑する清水さんは、2回生の夏に漕手からマネージャーに転身。主務は、部の運営に関する学生の最高責任者。マネージャーをとりまとめ、他団体との交渉や遠征の手配、部員の健康と安全の管理など、練習に集中できる環境を整えるのが清水さんの使命。ときにはスーツ姿でOBを訪ね、寄付金をお願いすることもある。新人勧誘の極意はすっかり身につけた。

学部生を中心に構成される部

員のうち約8割は、滋賀県大津市の瀬田川畔にあるクラブハウスで合宿生活を送っている。寝食をともにするコーチや上級生から叩き込まれるのは、ボート競技の技術にくわえ、人間としての礼節や社会常識、自主性と高い目標意識だ。

部員たちの精神的な要、主将の大野さんは、高校時代にはサッカー部で準レギュラーに甘んじた悔しさから、「初心者でも努力しだいでトップに立てる」ボート競技の可能性にかけた。優れた洞察力と小柄な体型は、コックス(船尾で漕手に指示を出す舵手)に好適だった。舵手で主将に立候補したのは、創部以来、大野さんが初めて。前例がないだけに反対意見もあったが、「大野ならやれると、背中を押してくれたみんな

の期待に、結果で応えたい」。

平日はクルー単位で、ランニングや筋トレなどの基礎練習が中心。朝4時15分に起床。5時から7時まで乗艇練習をこなし、1限の講義に向かい、午後の受講を終えて、夕方5時からの練習にふたたび集まる。代々受け継がれるモットーは「学業と両立してこそ一流選手」。

休日は終日、実戦練習。

選手たちのかけ声が水面に

響き、並走するコーチから櫂が飛ぶ。クラブハウスではマネージャーたちがカロリーや栄養バランスに気を配り、80人分の食事を仕込む。

歴史と実績の両面で一目おかれるボート部だが、いまだつかめぬ夢がある。男子エイトでの全日本大学選手権(インカレ)優勝だ。今年は5位に甘んじ、夢は後輩たちに託されることに。悔しさを胸に厳しさを増す練習で、二人のリーダーは仲間たちを鼓舞しつづける。

*ボート部ホームページ
<http://www.biwa.ne.jp/~rowing/>
※本誌23ページ参照



授業に潜入! 「おもしろ学問」 講義録

全学共通科目D群(保健体育科目)
「発達論」
〈吉田南総合館3階共北31教室〉

記憶と学習

脳のしくみをのぞいて自己を知る



田中真介

高等教育研究開発推進センター准教授

大学は、教養や専門知識を身につけるだけの場ではない。スポーツ活動や友だちとの交流、社会との関わりをとおして「なりたい自分」を探し、「自分らしさ」を発見し、人間として成長する場でもある。田中真介准教授が担当する「発達論」は、前期は脳科学的なアプローチから知覚や記憶、感情などのしくみについての理解を深める。後期は胎児期、乳幼児期、思春期、成年期、熟年期と、成長のステップを追いながら脳や体の発達について学ぶなかで、自分の未知の魅力を発見し、他者や社会との関わり、人間形成のありようを考える。学生たちは、新しい知識と自身の経験とを重ねながら、自己を客観的に見つめ、「世界に二人といない自分」の存在意義を実感する

◎たなか しんすけ
1987年 京都大学大学院教育学研究科修士課程中退
1987年 京都大学教養部助手
2003年 現職

専門は、発達論、発達診断学、障害療育学。研究活動の一環として、日本各地の保育所、幼稚園、小中学校および養護学校で、発達相談や教育相談活動を行なう。主な著作に、「重度心身障害児の発達と療育」(京都大学)、「乳幼児期・児童期臨床心理学」(村井健祐編「応用心理学の現在」北樹出版)、共著に「応用心理学事典」(丸善)、「新型インフルエンザ—ワクチン・タミフルは危ない!!」(ジャパンマシニスト社)。「発達がわかれば子どもが見える—0歳から就学までの目からウロコの保育実践」(ぎょうせい)など。

学生たちの受講理由

◆ サークルで子どもたちと接する機会があり、子どもの脳機能の発達に興味があつて受講しました。(文学部1回生 男)

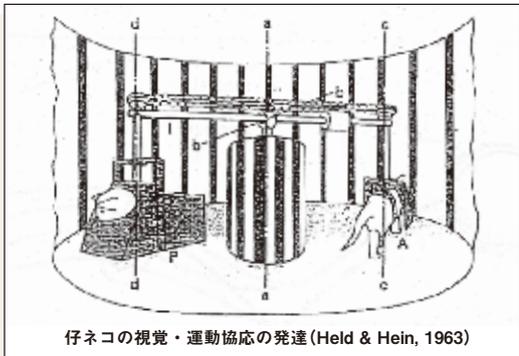
◆ デビデオ教材が毎回楽しみで、本では得られない知識を習得できるから。(農学部1回生 男)

◆ 先生が一方的に話しつつける講義は多いけど、この授業は私たちの意見を反映しながら進行するから楽しい。(法学部1回生 女)

◆ 自分の専攻とは関係ないが、脳に関心があつて受講。内容は期待以上。知らないことがかりでとにかくおもしろい。(理学部4回生 男)

※1 受動ネコと能動ネコの実験

同じ母ネコから生まれた2匹の仔ネコを、生後すぐから暗室に入れて育て、歩けるようになってから(生後8〜12週)、1日に3時間ずつ、図のような円筒形の装置に入れる。Aのネコは長発的に装置内を歩き回れるが、Bのネコはゴンドラに載せられていて必ず動かけない。2匹のネコはひとつの軸でつながっている。Aのネコが動いた同じ距離をBのネコも移動する。



仔ネコの視覚・運動協定の発達(Held & Hein, 1963)

五月某日、春風がこちよい朝。学生の姿もまばらな構内に野鳥の音が響く。一限の始業まではまだ五分。誰もいない教室で、窓から時計台を望む。机の上にはサークル勧誘のチラシが数枚。「学部不問! 予備知識不要! 国際関係論研究会(SRCS)」、「コンパスを手に森を走ろう! Orientating Club」。学生気分で行き交う中、教室はいつものまに賑やかに。八時四十五分をすこしまわって、田中准教授は小走りで教室に飛び込んできた。

おはようございます。あつ、朝ごはんの人がいますね。食べながらどうぞ(笑)。

達し、脳が活性化していることがわかりました。

授業の終わりに感想を書いてもらいましたね。「学習量が少なかったから、受動ネコは奥行きが知覚できなかったのではないか」といった感想が意外に多かったです。経験の質の違いに着目して、「みずから能動的に動くことで、はじめて見えてくるものがある」ということを発見した人もいました。まわりの世界に自分から働きかけてはじめて、身につく力があるのかもしれない。

では、人間は外界の情報をどのように学び、どのように記憶するのでしょうか。今日のテーマは「記憶と学習」です。「記憶のしくみ」を学んだうえで、「人間にとつての記憶とはなにか」を考えましょう。まず質問です。みなさんが憶えている、いちばん古い記憶はどんなことでしょうか。

●.....●
受け身じゃ、
大学にも身につかない。



前回の授業は、「感覚と知覚」というテーマで、「受動ネコと能動ネコ」の実験を紹介しましたね。

自発的に運動できる能動ネコと、受け身でしか動けない受動ネコとでは、「奥行き知覚」の発達に大きな違いがあることを学びました。受動ネコは、視界に入ってくるものを平面的な景色としてとらえていて、その奥行きを知覚できていなかった。一方の能動ネコは、奥行き知覚が発

達し、脳が活性化していることがわかりました。

学生A 二歳のころに大きなブランコから落ちたんです。落ちる直前まで、楽しく遊んでいたことはよく憶えています。落ちた後、痛かったことはすっかり忘れてるんです。

田中 痛みがきっかけで、「忘れる」しくみがはたらいたのかもしれない。

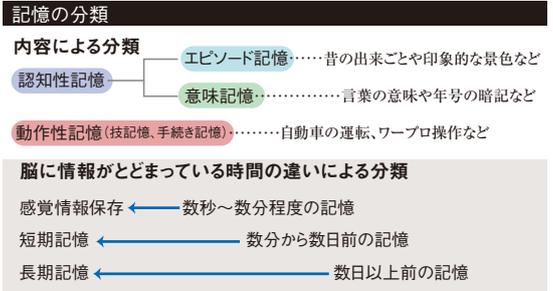
学生B 二歳のとき、餅を背中に載せられたんです(笑)。

田中 えつ、餅を? そりゃあ忘れられないね。でも、それはひょっとして、一歳の誕生日の祝い餅だったんじゃない?

学生C 二歳のときに両親が離婚して、引越して荷物

※3 前向き健忘症

自分の名前や住所など、発症する前の記憶はあるが、発症後の短期記憶は、わずかな時間だけ脳にとどまっ、すぐに消去されるため、数分前に自分がしゃべったこと、聞いたこと、なにをしようとしていたかもわからなくなる。これに対して、発症前の出来ごとを忘れちゃうのが「逆行性健忘症」。過去の記憶は検索できているが、ほかの脳機能は正常なので、発症しても日常生活にはほとんど支障はない。



自転車の乗り方って、
いちど憶えたら、
なかなか忘れないよね。

ここでは、ビデオ資料を見てもらいいます。記憶障害のあるイギリス人の男性、ジェレミー・カスさんの話です。

弁護士をめざしてケンブリッジ大学に進学した彼は、一九歳のときに前向き健忘症という診断を受けます。発症前のことはすべて記憶しているんですが、発症後は、わずか数十秒前の出来ことも次々と忘れてしまふ。だから、今朝なにを食べたのかも、食べた事実すらも憶えていない。とうぜん大学での勉強は

自転車の運転とかキーボードの打ち方など、体で憶える記憶が「動作性記憶」。技記憶、手続き記憶ともいわれますが、いったん憶えたとほぼ忘れないのが特徴です。

さらに、記録した情報が脳にとどまっている時間によっても分類できます。いちばん短いのは、見たり聞いたり触ったりした瞬間に感覚器官に保存される「感覚情報保存」。これは一秒以内の記憶です。次は、数秒から数日程度の「短期記憶」で、ワーキングメモリともいわれます。数日以上前のことを覚えてるのが「長期記憶」です。

記憶はその内容によって、「認知性記憶」と「動作性記憶」とに分類されます。認知性記憶はさらにふたとおりあって、みなさんが発表してくれたような幼いころの出来ごとや景色を憶えているのは「エピソード記憶」といいます。でも、私たちが憶えているのは過去の経験だけじゃなくて、たとえば講義で新しい言葉やその内容を憶えたりします。これを「意味記憶」といいます。では、もう一方の「動作性記憶」というのは、どういうものだと思いますか。

田中 生活の場が変わるといいうのは、わりと憶えているんですよ。その場面だけでなく、そのときの雰囲気とか香りなんかも……。

では、まずは記憶のはたらきの定義から。

① 環境世界の情報を受けとって記録する(記名 memory)

② 受けとった情報を一定期間保存する(貯蔵 storage)

③ 保存した情報を必要に応じて思い出す(検索 retrieval)

心理学の授業などでは、符号化、保持、想起という言葉を使うこともあります。

記憶はその内容によって、「認知性記憶」と「動作性記憶」とに分類されます。認知性記憶はさらにふたとおりあって、みなさんが発表してくれたような幼いころの出来ごとや景色を憶えているのは「エピソード記憶」といいます。でも、私たちが憶えているのは過去の経験だけじゃなくて、たとえば講義で新しい言葉やその内容を憶えたりします。これを「意味記憶」といいます。では、もう一方の「動作性記憶」というのは、どういうものだと思いますか。

意味をなさなくなる。年齢を重ねても、新たな経験を蓄積することができず、一九歳の状態にいつにリセットされてしまう。彼は日々どのように過ごしているのか、どんな困難があるのか、原因はなにか、そしてもうひとつだけいじな視点、彼にどんな援助が有効なのかを考えながら見てください。

ビデオは途中でありますが、ここまでになります。ジェレミーさんは結局、大学を辞めて家具職人の道を歩み始めます。弁護士になる勉強は認知性記憶のはたらきによる活動ですが、家具づくりは動作性記憶。記憶のしくみが違うのです。これを脳の機能、記憶シグナルの伝達のしくみで確認してみましょう。

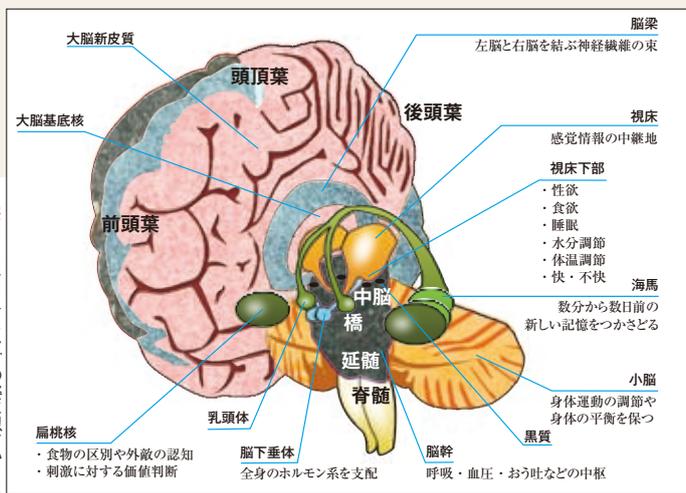
目や耳、皮膚などで感じた情報はまず、大脳辺縁系の海馬に送られます。情報は、海馬の神経細胞のなかで電気シグナルがぐるぐるを巡る神経回路のネットワークとして形成され保持されて、それが短期記憶になります。さらに数日すると、眠っている間にその情報が新皮質の関連領域に転送されて、長期記憶として保存されます。ジェレミーさんが数十秒前のことを憶えていられないのは、この海馬への伝達経路が壊れて、海馬に神経回路網がつけられないからです。

家具、つくりのような動作性記憶は、海馬を経由せずに、黒質や視床下核からなる大脳基底核、小脳を通じて大脳皮質に蓄積されますので、その機能は損なわれていなかったのです。

もしも自分がジェレミーさんだったらどんなことが困難になるのか、みなさんの感想を聞かせてください。

ビデオは途中でありますが、ここまでになります。ジェレミーさんは結局、大学を辞めて家具職人の道を歩み始めます。弁護士になる勉強は認知性記憶のはたらきによる活動ですが、家具づくりは動作性記憶。記憶のしくみが違うのです。これを脳の機能、記憶シグナルの伝達のしくみで確認してみましょう。

ジェレミーさんは自分の行動をメモやボイスレコーダでこまめに記録し、それを逐一確認しながら行動する。だからと知りあつて楽しい時間を過ごしても、その記憶はすぐに失われ、またゼロから関係を築かなくてはならず、なかなか心を開けない。新しい記憶が蓄積できないために、親しかった人との関係もぎくしゃくしてしまう。インタビュ取材の途中、彼の言葉がぶつりと途切れ、「ところで質問はなんだっつう」と困惑する表情が印象的だ。発症から数年、自分の表れた状況は、少し理解できるようになった彼は「弁護士になる夢が叶わないとわかったことが、いちばんつらかった」と嘆く。



※6 タツノオトシゴの姿に似ていることから名づけられた海馬は、4000万个の神経細胞からなる器官。ジェレミーさんは授業中に突然、脳の動脈瘤が破裂して倒れ、その後の脳内出血が要因で海馬に至る情報伝達経路を損傷した。神経細胞はほかの多くの細胞と違って、いちど死ぬと再生はしない。また、海馬の神経細胞は、酸素不足や栄養不足によって死んで知られていく。

ちょっと余談ですが、
こんなことが
ありました。



板書計画や用語の解説、指導のポイントや学生の反応など、約10年ぶりのノウハウがびっしりと詰まった田中先生のノート。「学生たちの反応に刺激されて、新たな視点を得られるのが楽しいですね」

自分がたしかに
生きているという
実感がもてないのです。

私は、人類の特徴である一足歩行と言葉を獲得する一歳児の発育に興味があつて大学院に進んだのですが、院生になって間もないころ、発達論の指導教官から、こんなことをたずねられました。「真介さん、一歳児はなぜ歩くんやと思つて?」。私は脳の研究をしていたので、「一歳ころになると脳の運動野に神経ネットワークができて、二足歩行をする信号を送り、それによって体のバランスをとることができるようになるからです」と答えました。「いいやちがう。子どもは『道草』するからですよ」。

ハツとしました。一歳児の行動を観察すると、たしかにそんなんです。小さな石を見つけてヨチヨチ、虫を見つけてヨチヨチと、目にとまるもの、気になるものに近づくことの繰り返しで、結果として前に進んでいる。この好奇心旺盛な「道草」こそが、一歳の子どもを歩かせる要因だったのです。子どもは歩くことでさらに刺激を受けて、脳が活性化される。脳の発達は「原因」ではなくて、道草の「結果」なんです。

このことは、言葉の習得についてもいえます。脳が発達するから話せるようになるんじゃない。話したいことがある、話したい相手がいるから、子どもは一所懸命に言葉を習得するので。一歳児の発達には、豊かな保育の環境と、話しかけた人たちの温かな応答が欠かせないということですよ。

次に見てもらおうドキュメンタリー映画も、ある記憶障害をテーマにしたものです。

主人公の関根萬司さんは、ウェルニッケ脳症という病気です。症状はジェレミーさんとおなじ前向性健忘症ですが、さらにもうひとつ、特徴的な症状があります。

それは見当識障害とよばれるもので、今日は何月何日なのかという時間の流れや、自分のいる場所を認識できなかつたり、夢と現実との区別がつかなくなるのです。

萬司さんは一九五七年、東京に生まれました。八三年に大学で同級生だった美和さんと結婚して、八五年には長男、二年後の八七年には次男が誕生します。仙台市の障害者福祉施設で働いておられたのですが、三五歳のときに発病します。

一九九二年の六月二十九日に胃の悪性リンパ腫で入院した関根さんは、七月一日に胃の全摘出手術を受けています。術後

はしばらくご飯を食べられないので、IVH (Intravenous Intubation) という、高カロリー輸液を使った栄養補給の点滴を受けることになりました。すると、八月一〇日あたりからめまいがひどくなり、健忘症や現実と夢との区別がつかなくなる見当識障害があらわれはじめます。原因不明のまま症状はますますひどくなり、転院先の病院でようやく、体内のビタミンB1欠乏を原因とするウェルニッケ脳症と診断されます。

ジェレミーさんの記憶障害は海馬への連絡経路の損傷が原因でしたが、萬司さんの場合は、海馬には異常はなく、大脳辺縁系の一部である「乳頭体」という器官のニューロンが萎縮していることが原因でした。乳頭体は、海馬からの信号を受けて、「エピソード記憶」がつけられる過程で重要な役割を担う器官です。

●ビデオ資料二(約四〇分)

ではビデオを見ましょうか。病気の原因だけでなく、奥さんのサポート、萬司さん自身の努力にも注目してください。

萬司さんは、発症前から通っていた馴染みのスーパーマーケットにメモをもって買い物に行くことはできますが、買い物から戻って三〇分もたつと、買い物に行つたことは忘れていきます。子どもたちの存在はもちろん憶えています。発症後の子どもたちの成長は記憶できません。だから毎朝起きるたびに、一九九二年にリセットされて、「うちの子、こんなに大きかつたっけ」と混乱するわけです。

その一方で萬司さんは、発症後にワープロの操作を習得しました。「O157」など新たに見聞きした言葉の意味も記憶でき、説明することもできる。エピソード記憶は困難だけれど、意味記憶や動作性記憶のネットワークに損傷はみられないというんです。

乳頭体のニューロンの萎縮は、アルコール中毒の患者さんや、火事で煙にまかれて一酸化炭素中毒になつた方にもみられる病状ですが、萬司さんは火事にあつたわけでも、お酒をたくさん飲んだわけでもありません。

膨らみつつける医療費の抑制策の一環として、当時の厚生省は一九九二年に、ビタミン剤の投与を「原則として保険適用外にする」という通達を出しました。この通達文は、よく読めば、病気の回復などに必要な場合は保険適応対象とすることを認



もしも自分だったら、
という視点が大切です。

※7「記憶が失われた時—ある家族の二年半の記録」

是枝裕和監督(1996)。第23回放送文化基金賞、テレビドキュメンタリー番組部門、放送文化基金賞受賞

萬司さんの記憶は30分から1時間ほどですべて消えてしまう。妻の美和さんはほぼ一日中、ご主人につきっきりで話しかけ、失われた彼の記憶を埋める。萬司さんは1時間ごとにノートをつける。自分の行動だけでなく、そのときの気分も書きとめる。食事をしたと、食べたものはまったく憶えていないが、「おいしかった」という感情は覚えていたからだ。自分の病気を理解している萬司さんは、現実とフィクションの区別がつかなくなるのを恐れて、小説は読まず、映画も見ようとしない。しかし、眠って夢を見ることだけは避けられない。

萬司さんの脳に、
いったいなにが
起こったのか。



めているのですが、ビタミンが必要な患者であるにもかかわらず、ビタミン剤の投与を控える病院が多数でした。

じつは、萬司さんが術後に受けた栄養補給の点滴の中には、生体に必要不可欠なビタミン剤がいつい含まれていませんでした。当時、同じような医療上の判断ミスによってビタミンの欠乏を原因とする記憶障害や見当識障害をひき起こした事例が二〇件以上報告され、大きな社会問題になりました。

ビデオは中断しましたが、萬司さんの症状は、すこしずつ改善の兆しがみられるようになり、かつて勤めていた福祉施設でふたたび働き始めます。さらに障害も認定されて、社会的な保障や援助を受けられるようになります。記憶障害はあるけれど身体的な異常はなく、通常の生活を営めると判定されていたので、これまでは障害者と認められなかったのです。

- みなさんはこのビデオを見て、なにを感じましたか。
- 本人だけでなく、ずっとそばにいてサポートしている奥さんみたいなんです。奥さんにも援助が必要ではないでしょうか。
- 生きている意味はなんだろうかと考えさせられました。自分が成長している実感や時間の蓄積がなく、「自分」は人の記憶のなかにしか存在しない。それも人に頼つてばかり、迷惑をかけてばかり。そんな状態で「自分」の存在意義を感じられるのだろうか。

二人とも よいところ 気づきましたね。

ジェレミーさんと萬司さんに共通しているのは、「人間としての価値ある経験」を積むことができないということ。記憶障害がもたらす弱点は、大きく分けて三つあると思います。

- 自分自身の時間的によりよい変化(豊かになってゆく過程)を確認できない
- 豊かな人間関係を築けない
- 自己信頼性が失われる

視点をかえればこの三つの弱点はすなわち、記憶障害のある人々への援助の観点を示しています。それは、①時間の経過とともに自分がよりよく変化していることを、人間的な関わりのおかげで実感できるような、②周囲の人たちの働きかけの豊かさ、社会の豊かさが必要であり、③そこで、かけがえのない自分を発見し自己信頼性を高めることができるということです。

じつは今日はじめて 気づいたことが あります。

奥さんの美和さんは、混乱するご主人につねに寄り添って、たえず声をかけ、萬司さんの不安に共感し、励ましつづけてい

ます。それが萬司さんをどれだけ勇気づけていることか。

私はこの映画をもう何十回も見ているのですが、美和さんのサポートの細やかさについて、今日はじめて気づいたことがあります。撮影スタッフが何度か訪ねてきたとき、奥さんは「是枝さん、こんにちは」と、スタッフの名前を呼びましたね。普通、知っている人に「〇〇さん、こんにちは」とは言わないですよ。これは、相手を憶えていないご主人の不安を感じとって、先に名前を呼ぶことでご主人を安心させたんですね。こういうさりげないサポートこそが、大切なのかもしれません。

ところで、みなさんはこれまでにたくさんさんのテストを受けてきましたよね。その多くは、ある時間断面で切り取った「知識の量」を問うものだったかと思えます。

人間にとって大切なのは、ある時点でどれだけ知識量があるかではなく、成長することができずかです。さらに、豊かな人間関係があれば、成長することができず。さらにそのような豊かな人間関係のなかで、どれだけ自分に信頼をおいて生きているかが重要ではないでしょうか。それによって、「記憶の意味」は大きく変わるのですから。

次回は「感情と価値判断」。ある人の魅力にひかれ、その人を好きになるときに、脳の中ではいったいなにが起こっているのかを考えます。じゃあ、今日の授業の感想を提出して、これで終わりましたよ。

二〇一〇年五月二十五日・六月一日 一限

受講を終えて

「ぼくらの時代にくらべれば、最近の学生はマジメですね」と田中先生。授業はサボらないし、ノートもきちんととる。課題を効率よくこなしたり、かたちを整える能力も高い。「でも、柔軟性や創造性が乏しい」と指摘する。

「スポーツ実習の授業で、ボールを使ってウォーミングアップするように促しても、互いに周りをうかがうばかり。見かねて見本を見せると、みんなほっとした表情で、それを真似るんです。そんな彼らの固い「受験脳」をささっとぶち壊してあげて、ほんものの学問の楽しさや魅力を伝えたいです」。

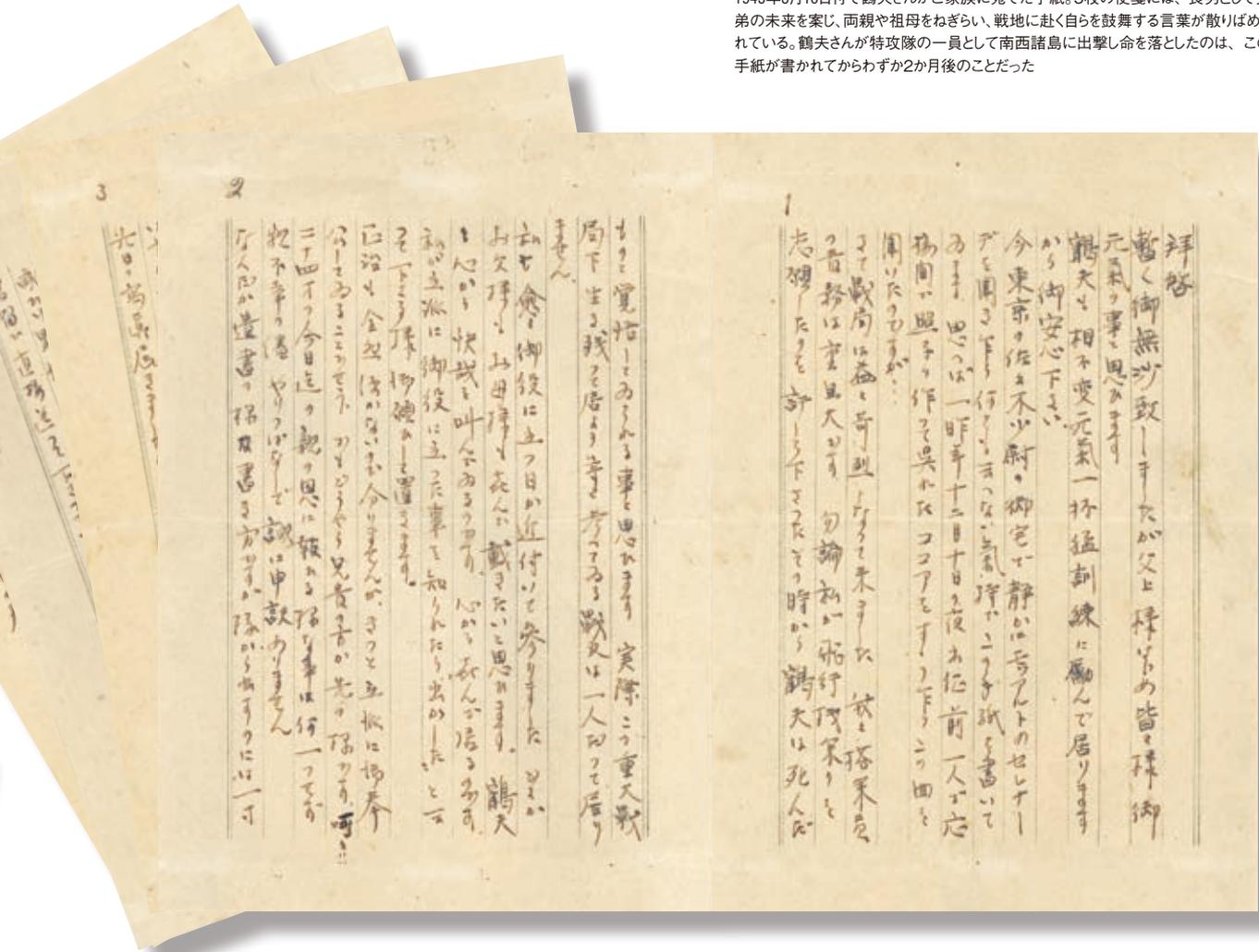
そんな田中先生に影響を与えたのは、名物教授として知られた故・森毅名誉教授の授業。「キミたち、大学の先生の言うことなんて、信じたらアカンで。最先端の理論なんて、十数年もすればひっくり返るんやから」。1回生たちはさっそくノートに書きとめる。すると森教授はニヤリと笑って、「というボクの話信じる?」。森教授の専門の数学でも扱われる重要な論法だ。

「ぼくもあんなふうに学生たちの虚を衝いて、深く長く心に残るような授業ができたらええなあ」。田中先生のその思いは、授業のはしばしにあらわれる。聴講を終えたとき、昨日とはちがう自分の存在を確認する。そんなことが経験できそうな授業かもしれない。(編集部K)



そんなの、あんまり
意味ないですね。

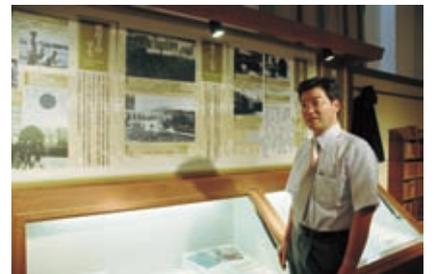
1945年3月16日付で鶴夫さんがご家族に宛てた手紙。5枚の便箋には、長男として兄弟の未来を案じ、両親や祖母をねぎらい、戦地に赴く自らを鼓舞する言葉が散りばめられている。鶴夫さんが特攻隊の一員として南西諸島に出撃し命を落としたのは、この手紙が書かれてからわずか2か月後のことだった



学徒兵からの手紙

秘められた静かなる覚悟

歴史展示室の常設展示「京都大学の歴史」の企画制作にも携わった西山伸准教授。手紙を寄贈された時岡さんのご遺族とは、学徒出陣に関する調査研究の一環で知り合った



◎にしやま しん
1987年 京都大学文学部卒業
1993年 京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学
同年から京都大学百年史編集史料室助手
2001年 京都大学大学文書館助教授
専門は日本近現代史。共編著書に、「田中秀央 近代西洋学の黎明」(京都大学学術出版会)、「学校沿革史の研究 総説」(野間教育研究所)など。

西山伸
大学文書館 准教授

京都大学大学文書館に所蔵される各種資料は約一五万点。このうち約半数は、歴代の総長や退職した教職員の書簡・書類・メモ類や、卒業生の講義ノート、学生運動に関係するビラ・機関誌、学生生活に関係する資料など、学内外の個人・団体から提供いただいた京都大学関係者の個人的資料。それらがいつ、だれによって、なぜ遺されたのか——貴重な資料を紐解けばその一つひとつにドラマがあり、京都大学の歴史が織り込まれている。『京都大学百年史』の編纂に携わった西山伸准教授は、第二次世界大戦の終戦五か月前に家族に送られた、ある学生の手紙に注目した

その整った字体と落ち着いた文章は、とても間近に死が迫っている若者の手によるものとは思えない。ここに紹介するのは、京都大学経済学部出身の学徒兵であった時岡鶴夫さんが、一九四五(昭和二〇)年三月一六日付で家族に送った手紙(大学文書館所蔵)である。^{*1}

四七六八名の京大生が学生の身分のまま出陣
戦局が苦しくなってきた一九四三年一〇月、それまで学生生徒に認められていた徴集猶予の権利が停止され、文系を中心に満二〇歳以上の



京都帝国大学経済学部から配布された「学徒出陣手牒」。縦10cmほどの手帳には、「軍人勅諭」、「教育に関する勅語」のほか、経済学部校舎の写真や、教官らの氏名・住所の一覧表も記されている



農学部グラウンドでの壮行式を終えた出陣学徒たちは、時計台前から正門を抜け、平安神宮まで行進した。枝ぶりの未熟な若いクスノキが60余年の時代の隔たりを実感させる(1943年11月20日)



茨城県の筑波基地から九州に出発する直前の時岡さんたち。日本各地から出陣した学徒兵の多くは、操縦士としての訓練を受け、このうち沖縄戦での特攻を命じられた者も少なくなかった。写真の彼らもすでに特攻隊に編成され、出撃の準備を整えつつあった(1945年4月)



出陣学徒のために、恩師や学友、家族からの寄せ書きされた日の丸。当時、京都帝国大学経済学部の教授だった蛭川虎三氏(のちの京都府知事)の名もある

※1 時岡鶴夫さんのご家族から、2003年に寄贈され、現在は京都大学百周年時計台記念館1階の歴史展示室に展示されている。常設展示「京都大学の歴史」では、文書・写真・映像・模型など約260点の資料を用いて、創立から近年までの京都大学の歴史を紹介している。時岡さんの手紙を展示している「戦争と大学」のコーナーでは、京大が帝国大学の一つとして戦争に深く関わっていくようすや当時の学生生活、そして学徒出陣について詳しく示している。

※2 出典：京都大学大学文書館編「京都大学における「学徒出陣」調査研究報告書」。大学文書館では、2004-05年度に総長裁量経費の採択を受けて京都大学における「学徒出陣」に関する調査研究を実施した。当時の学籍簿・学籍カードなどから在学中の入隊者・戦没者を割り出したほか、体験者の聞き取り調査、関係資料の収集などを行なった。その結果は前記調査研究報告書(全2巻)にまとめられている。



基地内から実家に送られた葉書にはすべて「検閲済」の朱印が捺されている。「本望通り飛行専修予備学生ヲ拜命シ、日々元気ニヤツテ居リマスカラ御安心下サイ」と記された葉書(右)は、1944年2月18日に投函された

入学から一年八か月後、時岡さんは学徒出陣で海軍に入隊、飛行科予備学生に採用され、戦闘機の操縦

検閲を避けて投函された 家族への手紙

入学から一年八か月後、時岡さんは学徒出陣で海軍に入隊、飛行科予備学生に採用され、戦闘機の操縦

このとき、京大全体では二九五七名が入隊しており、とくに文・法・経済といった文系学部からは約三分の二が大学を離れていった。そして、前後の時期を合わせると四七六八名が学生の身分のまま入隊しており、朝鮮出身者一名を含む二六四名の戦没が確認されている。

時岡さんは神戸出身、兵庫県立第一神戸中学校、松山高高等学校を経て一九四二年四月に経済学部に入學した。スポーツ万能で、所属していたアイスホッケー部ではたちまち頭角を現し、関西一のゴールキーパーになったという。また、友人たちによると、人柄もフランクで朗らかであり、誰とも親しくつきあえる人物だった。

学徒は同年一二月に陸海軍に入隊することになった。いわゆる学徒出陣である。

このとき、京大全体では二九五七名が入隊しており、とくに文・法・経済といった文系学部からは約三分の二が大学を離れていった。そして、前後の時期を合わせると四七六八名が学生の身分のまま入隊しており、朝鮮出身者一名を含む二六四名の戦没が確認されている。

学徒は同年一二月に陸海軍に入隊することになった。いわゆる学徒出陣である。



1925(大正14)年の誕生から80年ちかくにわたり京都大学のシンボルとして親しまれ続けてきた時計台。2003(平成15)年12月、創立百周年記念事業の一環として最新の免震構法を取り入れた改修工事を終え、外観や内装の雰囲気はそのままに、「京都大学百周年時計台記念館」に再生しました。館内には、歴史展示室のほか、530人収容の百周年記念ホールや国際交流ホール、レストランなどを備えています。

1930年ころの学生の下宿を再現したコーナーは、京大OBたちに大好評。マントに火鉢に囲基盤。質素な四畳半を前に、現代の京大生はなにを思うだろうか



時代の流れやテーマごとに分かれたケースには、貴重な所蔵品や資料が並ぶ。展示室の中央には、1939年の吉田キャンパス本部構内を150分の1サイズで再現したジオラマが陣取る

- 開室時間：9時30分～17時00分
- 休室日：毎月第1月曜日／年末年始（12月28日～1月3日）
※第1月曜日が祝日の場合、第2月曜休館
- 入場無料
常設展示「京都大学の歴史」のほか、企画展も適時開催しています。

訓練を受けるようになった。すでに、第一線で戦う下級将校は著しく不足しており、時岡さんら航空機の操縦を担当する学徒兵たちも、通常よりはるかに短い一年ほどの訓練を受けたのち実践に配備される状況だった。

その訓練期間中および任官後、おそらく多くの学徒兵も同様だったと思われるが、時岡さんは実家と頻りに郵便をやりとりしている。時岡さんは、姉三人、弟一人、妹一人の六人兄弟の四番目(長男)だったが、海軍入隊時、姉三人はすでに結婚していて実家にはおらず、弟も同時期

に陸軍に入隊し、実家には祖母、父、母、妹の四人が暮らしていた。手紙はこのような書き出しで始まっている。ここで指摘しておきたいのは、大

淡々と綴られた言葉に潜む 二四歳の心の揺らぎ

そもそも基地から出す郵便は、すべて葉書で、上官の検閲を経たものに限られていた。しかし、基地の外から出す場合にはそのような制約はなく、当時筑波で訓練を受けていた時岡さんは、東京の友人の実家から封書でこの手紙を送ったのだから、今日われわれが兵士たちが家族に宛てた郵便を見ると、それがどのような状況で書かれたのかも頭に入れておかないと、書き手の意図を読み誤ってしまう場合もあることに注意する必要がある。

手紙にはこのような文も書かれている。

私も愈々御役に立つ日が近付いて参りました。どうかお父様も母様も喜んで戴きたいと思ひます。

二十四才の今日迄の親の恩に報ひる様な事は何一つせず親不幸の儘やりつばなして誠に申訳ありません。なんだか遺書の様な書き方ですが、隊から出すのには一寸困りますので早手廻しにかけて置きます。

じつは時岡さんは、この手紙の一月ほど前の二月二〇日に特攻隊の編制下に入ることを命じられていて、すでにそのための訓練を行なっている最中だったのである。

前年の秋以来、日本軍に採用され

た特攻隊による攻撃は、攻撃参加者には帰還の可能性のない戦法であった。このときには、出撃時期こそまだ確定していなかったが、時岡さんは戦死が運命づけられたと言ってもよく、だからこそ東京の友人宅から手紙を送ったのであろう。多数の手紙の中でただ一通のみ、入隊前の家族とのふれあいについて述べているのが、時岡さんの心の揺れを物語るのだと読みとれるもの外的外れではあるまい。

手紙に凝縮された 青年の生きざま

時岡さんは、四月二六日に筑波を出発、鹿児島県の鹿屋航空基地に移り、しばらく待機したのち、五月二四日に南西諸島方面に出撃、戦死している。じつはこの待機中に、神戸から母の繁子さんが訪ねてきて、奇跡的に面会できている。

繁子さんは、待機場所を「九州の基地」とのみ聞いていたのを、戦争末期の交通事情のなか神戸から鹿児島に向かい、海軍の基地を六か所も訪ね歩いた末に、ようやく息子に会えたのだった。時岡さんと家族との強いつながりが察せられる、胸に迫るものを感じさせる話である。

学徒兵からの手紙一通一通には、彼らのそれまでの人生が凝縮されている。われわれは、手紙の背景にあるものも含めて読むことで、いっそう多くのことをくみ取れるのである。

手の届く国際交流を

国際交流会館修学院本館主事

槻木竜二

●つげき りゅうじ
1988年 神戸大学理学部卒業
1993年 総合研究大学院大学
(基礎生物学研究所) 博士(理学)
1994年 米国カーネギー研究所
1995年 米国ペンシルヴェニア州立大学
1998年 京都大学大学院理学研究科助手
2006年 国際交流会館修学院本館主事
2007年 京都大学大学院理学研究科助教

京都大学国際交流会館は、京大に在籍する外国人研究者や留学生たちを一年以内の期限つきで受け入れる宿泊施設。修学院本館、宇治分館、おうばく分館には、会館主事と主事補佐が各一名ずつ常駐。槻木竜二さんは修学院本館の主事補佐として二〇〇〇年に家族とともに入居。以来一〇年、「住民目線の支援」に努めている。

緑あふれる白川通に面したゲートを抜けて建物に入ると、かすかに香辛料の匂りが漂う。「夕食ときには、お国料理の匂いが廊下にも広がって、まるでエスニック料理店ですよ」。槻木竜二・まどかさんご夫妻は、二〇〇〇年秋に主事補佐として入居し、〇六年に主事を引き継いだ。



「5人家族にとっては部屋はやや狭いけど、広い庭と緑の豊かさに満足しています」と槻木さんご夫妻

修学院本館は1982年開館。留学生単身者用(キッチン、シャワー室共同)から、研究者家族用(5人入居可)まで、多様な間取りの宿泊室(129室)のほか、図書室、談話室、和室などの共有施設を併設。
*詳細は京都大学国際交流推進機構ホームページ参照 www.opir.kyoto-u.ac.jp/



平日の昼間は事務職員が常駐し、夜間と休日には守衛をおいているが、

家族へのサポートの重要性

「三人の息子のうち下二人はここで生まれ、一緒に学校に通ったり、いろんな国の人たちに囲まれて、それなりによい刺激を受けているんじゃないかな」。

「世界に開かれた大学として国際交流を深める」ことを基本理念に掲げる京都大学。二〇〇九年度に受け入れた外国人研究者は七二一人、留学生は一四三〇人に及ぶ。このうち修学院本館には中国や韓国、ドイツやオーストラリアをはじめ四〇か国からの留学生と研究者一二五世帯、一九〇人が暮らす(二〇一〇年六月現在)。充実の設備と手ごろな賃料が魅力で、入居希望者はたえない。順番待ちが多いことから、滞在は一年限定。日本の生活に慣れたところで、おのおのが新居を探して転居する。

「私は主事の立場で入居しています。が、家族にとってはここが『わが家』。妻も子どもも、ここでの生活をそれぞれに楽しんでいる。だから私は研究に集中できる。ほかの入居者もきつと同じじゃないかな」。

かくいう槻木さん夫妻はかつて、アメリカに四年ほど滞在した経験がある。「私たちも海外では外国人でした。恩返しというとおおげさですが、その経験をいかして、入居者のみなさんに京都の暮らしを楽しんでもらうお手伝いができればと……」。

「外国人」の経験を活かして

「三人の息子のうち下二人はここで生まれ、一緒に学校に通ったり、いろんな国の人たちに囲まれて、それなりによい刺激を受けているんじゃないかな」。

「世界に開かれた大学として国際交流を深める」ことを基本理念に掲げる京都大学。二〇〇九年度に受け入れた外国人研究者は七二一人、留学生は一四三〇人に及ぶ。このうち修学院本館には中国や韓国、ドイツやオーストラリアをはじめ四〇か国からの留学生と研究者一二五世帯、一九〇人が暮らす(二〇一〇年六月現在)。充実の設備と手ごろな賃料が魅力で、入居希望者はたえない。順番待ちが多いことから、滞在は一年限定。日本の生活に慣れたところで、おのおのが新居を探して転居する。

夫婦は夜間・休日問わず、ここに暮らしている。「おなじ住人として、彼らの不満や不安に素直に耳を傾けることができるんです」。事務方と入居者とのパイプ役になったり、マナーの悪い人には、もめごとになる前にそれとなく注意するなど、ご近所づきあいのレベルできめ細かな支援を心がける。

昼間は大学勤めの竜二さんに代わって、入居する奥さんたちからなにかと頼りにされるのがまどかさん。家電製品の使い方を説明したり、安売り店の情報や、保育所の空き状況を調べるなど、生活に密着した支援が喜ばれる。来日した子どもは近隣の公立の小中学校に通う。「エジプト人の息子さんの入学手続きを手伝ったのですが、辞書を片手に三時間かけて、ようやく書類が完成しました」。

住民どうしの交流も盛んだ。二階の多目的ホールには卓球台と大型テレビ。サッカーのワールドカップでは応援合戦が繰り広げられた。ボランティアによる週一回の日本語教室や茶道教室も好評だ。同じ国の人たちどうしが集まる小さなパーティも頻繁に開かれる。

「干渉しすぎない」配慮を

数年前にこんなことがあった。イラム圏から来日した研究者のお子さんがたびたび無断欠席するという連絡が、小学校の担任からまどかさんに入った。とくに雨の日に顕著だという。「お子さんの体調がよくないの？」と母親にそれとなく声をかけ、よくよく話をきいてみると、「雨の日はセレブレーション。家族でお祝いするんだそうです。雨が貴重な国ならではの考え方ですね。わかってみれば納得できるが、生憎偏見や宗教観の異なる人たちとの交流には、相手の文化を理解しようという姿勢が求められる。一方で、「干渉しすぎない」配慮も必要。「そのバランスが難しい。日ごろの信頼関係があつてはじめて、相手に届く言葉がありますから」。

修学院本館には特別に、主事、主事補佐のほかに医療主事の家族も常住し、急病人への対処や病院との連絡などにあたる。「入居者にとって私たちは、いざというときの安心材料。いわば『保険』のようなものですね」。仲良くなったご家族とは、転居後も交流がつづく。「久しぶりに新居を訪ねたら、泣いて喜んでもらえました。私たちにはできることは限られています。私たちが、『手の届く安心感』を提供することは、国際交流の一步ではないでしょうか」。

夫婦は夜間・休日問わず、ここに暮らしている。「おなじ住人として、彼らの不満や不安に素直に耳を傾けることができるんです」。事務方と入居者とのパイプ役になったり、マナーの悪い人には、もめごとになる前にそれとなく注意するなど、ご近所づきあいのレベルできめ細かな支援を心がける。

昼間は大学勤めの竜二さんに代わって、入居する奥さんたちからなにかと頼りにされるのがまどかさん。家電製品の使い方を説明したり、安売り店の情報や、保育所の空き状況を調べるなど、生活に密着した支援が喜ばれる。来日した子どもは近隣の公立の小中学校に通う。「エジプト人の息子さんの入学手続きを手伝ったのですが、辞書を片手に三時間かけて、ようやく書類が完成しました」。

住民どうしの交流も盛んだ。二階の多目的ホールには卓球台と大型テレビ。サッカーのワールドカップでは応援合戦が繰り広げられた。ボランティアによる週一回の日本語教室や茶道教室も好評だ。同じ国の人たちどうしが集まる小さなパーティも頻繁に開かれる。



茶道の留学生の奥さんたちに人気
月1回教室は研究者さんたちにも

入居者を対象とする防災訓練。消防署員の指導のもと、慣れない手つきで消火器を握る



医学部附属病院「積貞棟」が竣工

がん治療の拠点となる新病棟「積貞棟」が、病院東構内に完成しました。この積貞棟は、任天堂株式会社相談役の山内溥氏から、築後30年以上が経過した病棟を抱える本院の現状に対し、「京大病院にふさわしい病棟を建ててほしい」との意向で寄附をいただき建設しました。この意向をふまえ、患者アメニティを重視した高度先進医療・最先端医療を実践するための適切な環境を提供する病棟として、よりいっそう地域社会に貢献することをめざしています。

積貞棟は、地下1階・地上8階、延床面積20,379平方メートル、病床数は294床。急

速冷却・加熱で病院食の衛生管理を徹底する「クックチルシステム」を、国立大学病院としては初めて導入したほか、棟内には特別病室、外来化学療法ゾーン、がん情報コーナーなども備えています。



画が繰り広げられました。

イベントホールでは、産官学連携本部が中心となって、本学の産官学連携活動の紹介やiPS細胞研究をはじめとする最先端の研究プロジェクト紹介を行ないました。ブースには、日本各地の政府関係機関や大学、企業等から多数の来訪者があり、本学の研究成果や産学連携のしくみについて多くの関心を集めるとともに、活発な情報交換や議論が行なわれました。また、本年度は高校生の来場者も多く、本学の研究内容や学部の情報、オープンキャンパスの情報なども興味をひいていました。

イベント全体で5,121名(内閣府発表)の来場者を迎え、盛会のうちに終了しました。

学生会館七大学展示コーナーが開設

学生会館(東京都千代田区)の1階フロント正面に「七大学展示コーナー」がオープンし、2010年5月28日(金)にオープニングセレモニーが行なわれました。このコーナーは、七大学(北海道大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学)の情報発信の場になるようにと、学生会が会館内に設けたものです。ブースの場所は各大学の総長による抽選で決められたもので、京都大学のコーナーは入口に入って右側、大阪大学と東北大学との間に位置しています。

本学の展示コーナーのコンセプトは「京都大学の過去・現在・未来」です。京都大学の「足跡」、京都大学の「いま」、京都大学の「これから」と題して、本学の魅力をアピールしています。ブース内に設置した液晶ディスプレイで京都大学を紹介するDVD映像を映しているほ



FDのためのDVD教材「ティーチング・ティップス集」を開発

アナウンサーの話し方や伝え方のスキルを教員の授業力向上に役立てようと、情報学研究科の辻高明特任助教らはNHK関連団体の協力を得て、FD (Faculty Development) のためのDVD教材「大学教員向けティーチング・ティップス集」を開発しました。



本教材は、「ポイントを実際たせる」、「黒板を上手に使う」、「スライドショーをわかりやすく進める」、「質問で学生に考えてもらう」など、講義において重要な12の項目から構成されています。各コンテンツは、財団法人NHK放送研修センターのアナウンサーが教員役に模擬授業を行ない、その問題点や工夫点を解説するかたちで進行します。

このDVDは、情報学研究科のみならず、学内25部局の教員に配付し、授業力向上のために活用しています。

*本件についてのお問い合わせ

辻高明特任助教 tsuji.takaaki.4v@kyoto-u.ac.jp

か、2009年度に製作したオリジナルの「学位スツール」や人気の京都大学グッズなどを展示しています。

近くに行かれたさいには、ぜひとも学生会館にお立ち寄りいただき、各大学の個性あふれる展示コーナーをのぞいてみてください。

なお、学生会館のレストランでは、京都大学と早稲田大学が共同開発した古代ビール3種(ホワイトナイル、ブルーナイル、ルビーナイル)をお試しいただけます。

iPS細胞研究所(CiRA)を設立

世界初のiPS細胞(人工多能性幹細胞)に特化した研究機関として、iPS細胞研究所を2010年4月1日付けで設置しました。所長は、世界に先駆けてiPS細胞の作製に成功した山中伸弥教授です。若手からベテランまでの研究者が四つの研究部門(初期化機構研究部門、増殖分化機構研究部門、臨床応用研究部門、規制科学部門)に分かれて、この画期的な技術を医療として患者さんに届けるべく、iPS細胞を用いて病気の原因を探る、新しい治療法を開発する、細胞移植に関する研究を行なう、などの目標に向かって研究を進めています。

iPS細胞研究所の設立に先立ち、2010年2月に新研究棟が病院西構内に完成しました。新研究棟は、地下1階・地上5階建てで、延床面積11,943平方メートル。1階にはギャラリーがあり、展示パネルやタッチパネルディスプレイを使って、当研究所やiPS細胞に関する情報を提供しています(利用可能時間:平日の8時30分~17時15分)。3~5階は研究者のオフィスや実験スペースで、十数台の実験台が並ぶ「オープンラボ」とよばれる実験スペースが各階にあります。地下1階と地上2階には、動物実験施設や細胞調整施設を設置しています。



編集後記

『紅萌』18号をお届けします。本号から編集者を替えて、誌面構成を変更しました。まず表紙。京都大学のキャンパスを意外な角度から切り取った写真を表紙としました。日頃見慣れたキャンパスが新鮮に見えるのが不思議です。また、各界で活躍されている京都大学OBの方にご登場いただくことし、福岡伸一さんには巻頭エッセイをご寄稿いただき、綾辻行人さんは京大にお招きしてインタビューしました。

巻頭座談会では白眉プロジェクトの第1期生のお話を伺いました。第1期生18名の中から取材に応じてくださった3名は、それぞれ分野の異なる研究者です。しかし、京都大学の「自由の学風」の良さを守り、そして発展させてくださる点では共通したパーソナリティをもっていらっしゃる感じました。

田中耕治先生と西岡加名恵先生には教育評価に関する研究の最前線を寄稿いただきました。「教師が自分の教育実践を評価する」ことが教育評価の第一義的な意味である。たいへん耳の痛い話ではありますが、明日の教育をより良いものにするためにはよく考えるべきことです。「授業に潜入！『おもしろ学問』講義録」というコーナーを設けました。初回は田中真介先生の「発達論」（全学共通科目）の潜入レポートです。一方的な講義ではなく、ビデオ教材を交えての学生との議論が進められる講義。また学生に戻ってこんな講義を受けてみたいと思う方も大勢いらっしゃるのではないのでしょうか。「ふりかえれば未来——モノ語る京大の歴史」は西山伸先生の「学徒兵からの手紙——秘められた静かなる覚悟」。京都大学百周年時計台記念館1階の歴史展示室に常設展示されている、京都大学から学徒出陣し、戦死した青年の手紙についての話です。4,768名の京大生が学徒兵として出陣、264名が戦没したという事実。この編集後記を執筆の日、繰り返してはならない過去を京都大学の歴史の中に刻んでおかなければならないと感じた65回目の終戦記念日でした。

2010年9月
広報委員会『紅萌』編集専門部会

京都大学広報誌 紅萌 — 第18号

2010(平成22)年9月25日発行

編集・京都大学広報委員会
『紅萌』編集専門部会

発行・京都大学総務部広報課
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
TEL 075-753-2071
FAX 075-753-2094
URL <http://www.kyoto-u.ac.jp/>
E-mail kohho52@mail.adm.kyoto-u.ac.jp

制作協力 京都通信社
デザイン 柴永事務所

『紅萌』の既刊号は、次のURLで閲覧できます。
<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/issue/kurenai/index.htm>
©2010 京都大学(本誌記事の無断転載・放送を禁じます)

附置研究所・センターの活動を紹介します 「品川セミナー」を開催

2010年6月4日(金)に「京都大学東京オフィス」(東京都港区)にて、第1回「品川セミナー」を開催しました。

品川セミナーは、本学に設置された22の附置研究所およびセンターでの最先端の研究活動のようすを広く一般の方がたに知っていただくこと、毎月1回第1金曜日の夕方に、「京都大学東京オフィス」で開催している連続セミナーです。第1回は、松沢哲郎霊長類研究所長が「人間とは何か——チンパンジーとの比較から」と題して講演。サイエンス・カフェ風のくつろいだ雰囲気の中で、最新の研究成果について



の松沢所長のわかりやすい解説に、参加者は興味深く聞き入っていました。

第2回の7月2日(金)は、清水展東南アジア研究所長が「グローバル化って何だろう——フィリピン山奥の世界遺産の棚田村から見たら」と題して開催。今後も継続して、2012年3月2日(金)の第22回まで開催する予定です。

*「品川セミナー」に関する詳細は、
http://www.kuic.jp/top_sinagawa.html まで

「科学・技術フェスタ in 京都」 ——平成22年度産学官連携推進会議」 に出席



京都大学は、6月5日(土)に国立京都国際会館で開催された「科学・技術フェスタ in 京都——平成22年度産学官連携推進会議」に出展しました。産学官連携推進会議は、科学・技術の重要性や産学官連携の成果を国民に広くアピールすることを目的に、毎年1回京都で開催されているイベントです。

本年度は、「科学・技術フェスタ in 京都」として装いを新たに、現在政府で検討中の「グリーン・イノベーション」や「ライフ・イノベーション」などを柱とする「新成長戦略」がテーマとして取り上げられたほか、産学官連携によるシーズとニーズのマッチング、高校生から一般市民を対象とした科学実験教室など、各種企

第61回京都大学・東京大学 対校競漕大会を開催

6月20日(日)、第61回京都大学・東京大学対校競漕大会が大津市・瀬田川にて開催されました。当日は大雨の中での開会式でしたが、対校レースが開始されるころには雨も上がり、松本統総長も観戦するなかで、熱戦が繰り広げられました。

女子クォドルプルを含む対校4レースにおいて、京都大学ボート部は3勝1敗で勝ち越し、メインレースの対校エイトレース(3,200m)では、2009年に引き続き京都大学が勝利しました。

今回、京都大学ボート部は新しい試みとして、「WiMAX高速大容量通信システム」を利用した実況放映を行ないました。伴走艇や橋上、川岸からレースをビデオ撮影して、パソコンを通じて送信し、艇庫屋上観覧席に設置した大型ディスプレイ4台で放映しました。このWiMAX映像中継は、現役ボート部員や



追憶の京大逍遙◎「虚」の世界にちりばめられた「実」

綾辻行人
推理小説作家

霧 雨降るとある午後、綾辻先生とともにキャンパスを歩いた。時計台前で立ち止まる。京大教育学部に入学したのは一九七九年。「共通」次の第一世代だ。

東一条通を渡って吉田南構内に、「朝ここで友だちと会うと、そのまま近くの雀荘に直行するか、教養部の尚賢館でバンドの練習」。木造半屋建ての尚賢館は一九八八年に焼失。「学生自治の象徴」と言われたA号館をはじめ、教養部の建物は次つぎに取り壊され、新校舎が建ち並んだ。

たどり着いたのは吉田グラウンドの南西。京大推理小説研究会(ミステリ研)。部室のドアの向こうには「回生が二人。大先輩の突然の訪問に頬を紅潮させた。

部室の壁には、ミステリ研名物の「犯人当て」の作中リストが張り出されている。月一回、担当委員の執筆した短編小説をみんな読んで、犯人を推理し評論する。一九七四年の創部時から続くこの活動は現在も受け継がれる。「もう二九六回か。これだけ続いているのはすごいな。ぼくが一回生のときに初めて書いたのは、第六七回の『Pの悲劇II』。Pは教育学部のP、ですね。」

現世は夢、
夜の夢(こゝろまて)
江戸川乱歩を
読みふけた少
年は、小学校六

年生で初の短編小説を書いた。簡単に作家などなれないと知りつつも、高校

三年のときに手にした赤本で「推理小説研究会」の存在を知り、迷わず京大進学をめざす。「同志に会える」と訪ねたミステリ研は、想像とちよつと違っていた。「作家志望はほくだけだった」。

同期の友人が就職活動や卒論に追われていたころ、「単位も足りなかったし、体調も良くなかった。で、早々と留年することに決めた」。その年に一念発起して書いた作品が、のちに推理小説界に衝撃を与えたデビュー作『十角館の殺人』の原型となる長編だった。

「そんなことをしていたぼくを大学院に誘ってくれた人がいて。オーバードクターの三年を含めると結局、一三年間も京大のお世話になりました。一浪二留はあたりまえ、とがめる人はいなかった。『自由の学風』とはつまり、それだけ学生の自律性が信じられていたわけなんですよ」と振り返る。

『十角館の殺人』の出版は二六歳、博士課程二年めだった。若き天才の登場は注目を集めるが、作家で食えるわけがないという分別はあった。「そのへんは現実主義者だったんですよ。めいっばい借りていた奨学金の返済を少しでも先延ばしにしたいとか、学割はなにかと助かるとかね。でもやっぱり、京大の空気が好きだったというのも大きなかな」。その後、綾辻氏が牽引した「新本格」のうねりの原点は、この「京大の空気」こそあったのかもしれない。

「現世は夢、夜の夢(こゝろまて)は江戸川乱歩の座右の銘。この言葉に感化され、この道に進んだ。でも、いくら時代と切り離れた『虚の砦』を造ろうとしても、作品にはどうしても自分の生きる時代のリアルがにじみ出てしまう。あとで振り返ってみて痛感することです。」



合格発表の日に、時計台の前で万歳したという綾辻氏。「建物の正面入口から外を見たときのクスノキの影、とても美しい絵になってますね。なんて見ても飽きなかったな」

小説の中に生き、
続ける一人の先輩

「ぼくは虚を描く作家。実在の人物をモデルにすることはあまりないんですが、京大関係では二人だけ、登場人物のモデルにさせてもらった知人がいます。一九八九年に刊行の『人形館の殺人』

は、京大に近い左京区北白川のお屋敷町が舞台だ。百万遍や吉田山、琵琶湖疏水、法然院など、馴染みの

ある地名が随所に登場する。主人公・飛龍想一の幼なじみの架場久茂は、「ぼくが五回生のとき、教育社会学研究の助手だった架場久和さんがモデル。『論文さえいいのを書けば通るから』と、大学院進学を勧めてくれた人です。いまは関西大学の社会学の教授。あまり論文は書いてないみたいですけどね(笑)」。

もう一人は人形館の住人で動物学を専攻する理学部の院生・倉谷誠。「モデルは倉谷滋さん。尚賢館で一緒にギターを弾きながらバカ話をしていった二つ上の先輩です。いまは神戸の理化学研究所にいて、世界レベルの研究業績をあげている人物なんです。小説の中では『部屋でハムスター飼っている変な大学院生』。これは、昔の彼のキャラクターをそのまま書いてしまいました。」

人生になに一つ無駄なものはない。「就職せずに留年したこと、作家への道が拓けた。すべてが意味あるものとしてつながっている。それがわかってくるのが、人生後半の妙味ですね。この妙味を味わうためには、そのときどきを一杯に生きるべし、かな。ぼくはほら、一所懸命に麻雀してたからね(笑)」。



4年ぶりに訪ねた部室にて。ミステリ研には、「華麗なる没落のために」(通称・カボソ)と名づけられた連絡帳が代々受け継がれている。「この時代に、まだこんなアナログな連絡帳を使っているというのは、なかなか良い感じですね」

- ◎あやつじ ゆきと
- 1979年 京都大学教育学部入学、推理小説研究会に所属
 - 1983年 大学院教育学研究科に進学、逸脱行動論を専攻
 - 1987年 『十角館の殺人』(講談社)を刊行、作家デビュー
 - 1989年 大学院教育学研究科博士課程修了
 - 1992年 『時計館の殺人』で第45回日本推理作家協会賞(長編部門)受賞

謎解きやトリック、どんでん返しの面白さに主眼をおいた「新本格ミステリ」の旗手として注目され、その後のムーブメントを牽引。人気の「館」シリーズのほか、「深泥丘奇談」、「Another」などの怪奇幻想小説にも定評がある。



京大生時代に出版したデビュー作『十角館の殺人』と京大界隈を舞台にした『人形館の殺人』。いずれも講談社文庫

